

日本産業革命期における「運命」言説の位相

——石川啄木の生涯を参照系として——

小 林 康 正

はじめに 一咳をする隣人

石川啄木の生涯が不遇に満ちたものであったことはよく知られているが、とりわけ北海道で過ごした期間ほど波乱と挫折に満ちた時期はなかった。予期せぬ大火で函館の職場を失った啄木は、半年以上にわたって札幌、小樽、釧路と流転を続けることになる¹⁾。

知人の紹介によって新聞記者の職を得た啄木は、明治40（1907）年10月2日の黄昏、小樽市の中心にある南部煎餅屋の2階に落ち着くことになる。啄木が家族とともに占めたのは六畳と四畳半の二間であったが、襖一重へだてた隣室には、すでに別の住人が暮らしていた。

家移りしたその夜、啄木はこの隣人の咳が気に掛かったようである。「雨の音繁きに隣室より変な咳払いきこえ、遠く聞ゆる夜回りの金棒の響は函館のそれよりも忙しげ也」と日記には記されている。たった一枚の襖では隣室の物音を防ぐこともできなかった。

だがそれにしても、わざわざ書き残さずにいられないほど、咳払いが耳につき、さらには尋常でないものとして心に留まったのは何故なのか。もちろん、咳だけを取り出して問題とすることには異議もあるだろう。なるほどこの一節は、小樽初夜の印象を耳に触れることから率直に記したものとみるのが妥当かもしれないし、書き進めるにつれ、その関心が小樽という町の印象に

移行しているのも事実である。

そうした穏当な解釈を承知の上で、なおも問うのであるが、この咳払いに啄木が忍び寄る「運命」を感知していたという解釈は成り立たないだろうか。そのような過剰ともいえる推測を棄て切れないのは、咳がこの時代にもっていた特別な喚起力を思うからである。

当時、咳によって暗示されたのは、他ならぬ結核という病魔であった。この死病と恐れられた病は、人々の身近から有為な若者たちの命を次々と奪い、社会に暗い翳を落としていた²⁾。咳は、ただうるさいというだけではなく、死を想起させる不吉なものとして銘記されていたのである³⁾。

『一握の砂』には結核に取材した作品がいくつか収められているが、たとえば「その名さへ忘れられし頃／飄然とふるさとに來て／咳せし男」という歌は、そうした咳と病魔の観念が啄木のうちに確かに刻まれていたことを読み取らせるであろう⁴⁾。しかも、このときすでに啄木は、実姉をこの病で失い、それは現実の恐怖となっていた⁵⁾。

しかし、そうした咳をなおいっそう不穏な予兆として啄木に印象付けるものがあつたとすれば、それは咳の主のせいであつたかもしれない。隣室にいたのは、姓名判断を業とする天口堂・海老名又一郎という男であつた⁶⁾。居を移すにあたって、啄木は隣室に掲げられている姓名判断の朴の木の看板を見つけて、戸惑いを抱いているが、新たな出発が始まろうとしているその時、

姿の見えぬ運命の司令が続けるいつ終わるとも知らぬ咳払い、その不吉さをより強めたと考えられなくもない。後述するように、流浪の売卜者ほど、啄木に「運命」の傲岸さを想起させる存在はなかった⁷⁾。

これまでの記述には、憶測を重ねたに過ぎないという誹りもあるだろう。だが、「運命」という隣人と、啄木がこうして出会っていたことに間違いはない。啄木はこの隣人と対話し、またそれ以前にもそれについて繰り返し思いをめぐらしていた。彼の人生において、「運命」が咳の漏れ聴こえるくらいの近さに纏わり付いていたことは確かなのである。

標題に示したように小稿の企図は、日本の産業革命期における「運命」に関する言説の具体的位相を、石川啄木の生涯から照射しようというものである。したがって、ここで述べた憶測の妥当性を、啄木という主観のうちに確かめようと書き進めるつもりはない。目指されるべきは、彼の「運命」に対する格闘を辿ることで、啄木にはすべてを感知できなかったであろう「運命」が占めた言説空間の相貌を知ることであり、さらにはそれらの言説を限界付ける社会的文脈をも視界に収め、この憶測を兆候として見据えることなのである。

したがって、わざわざこのような解釈の開かれた挿話から議論を始めたのは、そのような連想を我々に抱かせる想像の場がそこに存在しているという事実を確認するためである。聞き耳を立てて取り逃すまいとするものの正体は、その目論みの正しさとして証拠立てられるような問い掛けの中でしか捉え切れないものであり、咳はいわばその入り口に過ぎない。問題は啄木の主観ではなく、後からやってきた我々がそれらの対象とのインタラクティブにおいて感知するような暗黙知に属する発見であり、そこに課される義務があるとすれば、できるかぎりそうした関係を明示することであろう。いずれにしろこの挿話は、感情・思考

・言説・政治・制度といった内面から外部にわたる近代⁸⁾空間に分け入っていく入り口を提供し、小稿の分析の視野を広げてくれるはずである。

1 産業革命期における「成功」言説群の出現

日本の産業革命が本格化する20世紀初頭⁹⁾、吉凶禍福を予知予言する易断、九星術、姓名判断、観相・骨相学などのいわゆる「運命説」が、社会の表舞台に登場するようになる¹⁰⁾。その一方この時期には、独立独行による自己の「運命の開拓」を主張する「運命論」が盛んに叫ばれるようになった。日本の資本主義体制が確立しようとするその時代は、「運命」が人生における重要なキーワードとされた時代でもあった。

端的に言って、小稿の関心は、この時代における「運命」に対するさまざまな言及を、社会的な文脈や社会意識の流れに置くということに出発している。

しかしながら、こうした検討を行うためには、それに先行し直接影響を与えた「成功」言説や、その反応としての「煩悶」、さらには、それを回復するための「修養」言説などの同時代の対抗・相補言説を、社会的な文脈に配置し、その引用・反駁の影響関係を逐一測定してみる必要が、当然ある。ただこれらの言説ひとつひとつが量的にも質的にも単独で検討されるに十分な内容を持ち、さらにその先行研究も数えるほどしか存在していない。また筆者も現在その準備がない。

したがって、小稿では、上述のような関心と視野をもちながらも、個人史レベルにおいて「運命」に対する接近と言及が、どのようにおこなわれていたのかという一つの側面から、「成功」－「煩悶」－「運命」－「修養」などの「新語」¹¹⁾によって新たに創造された言説空間のありようを提示するという方法をとることにした。

この節では、そうした言説空間の概要をとりあえず描写すると同時に、最後に小稿の見取り図を提供しておく。

日本近代において重要な役割を果たした立身出世イデオロギーについては、教育史や教育社会学などが多くを明らかにしてきた。とくにE・H・キンモンスや竹内洋の研究は、初等教育の普及後に起こる立身出世の大衆化が「成功」言説を要請し、さらにはその現実的対応が「煩悶」「修養」という派生的な言説を生み出したことを指摘している¹²⁾。こうした一連の業績は、小稿にとってだけでなく、現代都市生活者の起源である「新中間階級」の心性を明らかにする意味で重要な貢献である。ただ当然ながらその多くは教育、すなわち青少年期を対象としたアプローチとなっており、それらの知見をここでの関心に沿わせるためには、少なくともそれを都市生活者全体のものに位置づけなおし、彼らの世界観や生活意識にまで対象を拡張する必要がある。小稿が注目する「運命」というキーワードは、そうした課題を追究する上で、きわめて重要な役割を担うと思われる。「運命」はそれ以外のことばよりずっと幅広い層に流通していたからである。

「運命」に対する言及は、「成功」「煩悶」「修養」の言説群の中で盛んになされていた。きわめて図式的理解の提示に止まらざるを得ないが、「運命」を含めたこれらの言説の関係を示せば、次のように言えるであろう。明治35(1902)年に始まる「成功ブーム」¹³⁾は、初等教育の普及と中等教育受容者の増大、それに反する高等教育の政策的な制限¹⁴⁾、さらには官界での人材需要の減少によって生じた学問立身の遅滞と深いかわりがある。つまり、一定程度の教育を受けそれに相応しい職業と待遇を求める層は、それらの要求に答えられない官界を見限り、その関心は当時勃興してきた実業界に向けられたのである。産業社会の急激な拡大がもたらした社会的膨張は

若者の意識にも投影し、実業熱を巻き起こした。成功ブームとは、資本主義体制の急激な拡張の中で、あらゆる価値を金銭的尺度で測るような投機的、野心的な企てが敢行された実業家＝「虚業家」¹⁵⁾の時代のことであった。

こうした企ては、それが勃興期のものであるがゆえに、ほんの一部に極端な成功者を生み出した一方で、残された者の殆どを失敗者にしてしまった。そのような成功願望の肥大化と空転は、そのギャップの大きさの分だけいっそう落胆を増していったといえるだろう¹⁶⁾。その結果が、藤村操の自殺をきっかけとして社会問題化した「煩悶」の流行であった¹⁷⁾。そして、このような「煩悶」や失敗に耐えるため、欲望の適正化と挫折に対する耐性の必要性が社会的に認識されるようになる。その有効な方策が「修養」であった¹⁸⁾。明治40年代以降になると、「修養」の名を冠した著作・雑誌が夥しく出版され、講演の演題とされていく。このように明治30年代後半から登場した「成功」「煩悶」「修養」の言説は、論理的な関係という以上に、歴史的な関係として考察される必要がある¹⁹⁾。

そして、「運命」もこれらの言説空間の中に位置づけられ、またそれを構成する重要な用語であった。ここで言及されるような「運命」は、もともと『西国立志編』以来の「立身出世の焚きつけ読本」²⁰⁾に由来している。そこで語られたのは、小事を軽忽しない態度や勤勉などの品行によって導かれる福運や機会であった²¹⁾。このような言及は、「成功」願望の膨張とともに、「運命の開拓」というキャッチフレーズのもと、奮闘して切り開いていくものとして語られるようになっていく。

ただこの節の最初に述べたように、同時代において、「運命」がそのような意味で塗り固められたわけではない。それとは反対の意味を与えられる場合もあった。内田魯庵は、この頃の「時代精神!？」を並べ立

てた中で、「最も信仰すべきものは？」の問いに、「方鑑人相九星術」と答えさせているが²²⁾、奮闘では到達し得ない「成功」を、占いという手段に頼って成し遂げようとする風潮がそこには蔓延していたのである。

そうした背後には、「成功ブーム」の正体がじつは失敗ブームであり²³⁾、奮闘が「成功」へと繋がるという確信がすでに持てなくなっていたという事実があった。そのため、奮闘成功説は常に「運命説」によって疑われ、奮闘論者や品行論者は必ずといっていいほどその著作において、「運命」の支配を否定する必要に迫られたのである²⁴⁾。たとえば、「成功と運命」という章をわざわざ設けた谷本富の『新道徳 商業適用』²⁵⁾などは、こうした事情をよくあらわしている²⁶⁾。しかも谷本は、僥倖による「成功」を否定していたものの、そうした「運命」を予知予見しようとする態度を完全には否定していない。人事を尽くして天命を待つ限りにおいてはであるものの、当時流行していた高島嘉右衛門の易占などの有用性は認めているのである。

こうした影響は、何も「運命論」の側だけに起きていたのではない。この時期の「運命説」も、単純に過去の反復でなく、当時の「運命論」を踏まえて構築されていた。「転禍作福」をキャッチフレーズとして日本哲名学館を起こした小倉鉄堂は、自らの秘術である「哲名術」(＝姓名判断)を説くにあたって、悲観哲学の流行という現状から説き起こし、「運命」をいかに統御するかが「成功」の鍵であると述べた。そこには、「成功」「煩悶」「修養」そして「運命」という関係が見事に収められていたのである²⁷⁾。

「運命論」と「運命説」のこのような関係を踏まえた上で、この時代にマスターナラティブとなった2つの「運命論」ー加藤咄堂と幸田露伴ーからその具体的内容を確認しておこう。明治後期から昭和にかけて

「通俗道徳」に関する著作を量産した加藤咄堂は、明治37(1904)年に『運命観』を著している。「迷妄の信は羸弱の想と共に闊歩するの今日」を憂えた咄堂は、この中で日本在来の「運命説」ばかりでなく、古今東西の宿命観を博搜し、そこにある「不健全な運命観」を破し、正しい運命観、つまり、進歩主義と努力主義に支えられた処世の大道を歩むように勧める²⁸⁾。開運における「修養」の必要性を説き、至誠・至情によって天地・鬼神を動かすことが可能だというのである²⁹⁾。咄堂のこうした主張は、一貫したものであり、彼の多くの他の著作においても、そうした「修養」を力説している。『運命観』は、それらのいわば理論編といったおもむきである。

一方の幸田露伴の『努力論』は、もともと雑誌『成功』³⁰⁾ーアンビシャスな青年たちに向けて発行され「成功ブーム」の火付け役となった雑誌ーに掲載された文章を中心にまとめた著作であるが、再版の際、その執筆動機について振り返り、その当時人々が余りに「成功」に汲々とし、多くの落胆者を生産していたからだと述べている³¹⁾。その冒頭は「運命」に対する誤った見解の修正に向けられており、そのような状況からたやすく「運命説」に陥る人々を戒めることから始められている。このように咄堂、露伴の書はともに、「運命説」の批判に力を傾けており、「成功」のために「修養」と「努力」を説いていた。大きな括りでいえば、通俗道徳と呼んでいいだろう。

これまで見てきたように、産業革命が本格化した新世紀の日本では、「成功」「煩悶」「修養」そして「運命」といった新語によって、新しい社会に相応しい言説空間が誕生していた。たとえば「人生」というようなことばで表現するのが適当と思われる大衆社会的個我のプロブレマティークが稼動するのは、こうした言説空間においてではなかったろうか。この時代に生きた

人々は、それぞれのことばに独自の強調点を置きながら自らの人生を語り、意味づけていったと思われるのである。

以上、日本産業革命期の「成功」を始めとした用語で構築された言説空間について整理したので、小稿の見取り図について、少し述べておきたい。

前述したように、こうした言説空間のありようを正面から論じるのではなく、それをある一人の人物から見えてくる相貌として描く方法を採用する。すなわち、石川啄木の生涯において、「運命」というキーワードがどのように語られ、どう付きまとっていったのかをまず明らかにする。石川啄木は、その類希なる文学的才能と夭逝を除けば、当時の普通の青年たちと同様の「人世行路」³²⁾を辿った人物である。そうした彼の格闘に満ちた「運命開拓型」の生涯は、啄木個人の経験という枠を超えて、この言説空間と社会的布置を照射すると考えられる。

なお小稿は比較的長文なので、ここで節ごとの概略を述べておくことにする。まず2節では、啄木と「運命説」の出会いについて述べ、当時の青年たちがそれに魅せられていたことについて言及する。つづいて3節では、啄木と姓名判断師がともに明治末期の成功青年に属し、所謂「時代閉塞」の中で失敗者に位置付けられていることを指摘する。4節では、啄木の中学退学から渡道までの行跡を略述し、そこでの運命観の変遷を辿る。5節では、啄木の人生において転換点となった北海道体験の意味を、産業革命期にそこが占めた「成功」の地政学上の布置から明らかにする。6節では、啄木の最後の上京を投企(＝投機)的成功観に位置づける。7節では、啄木が自分や家族の結核を隠蔽・拒否し、自らの「運命論」から排除したことを指摘する。なお、「おわりに」の内容については、その最後で要約を試みたので、それを参照してもらいたい。

また、小稿で扱う「運命」を含む言説空間の問題は、現在論者が進めている日本近代における異端的な実践(知)－姓名学・観相・骨相学・家相学など占い実践³³⁾－についての一連の研究と深い関わりがある。つまり、小稿は、これらの異端的な実践と相同包含関係にある「運命説」が生産される言説空間とその社会的布置を問題にしているのである。

2 姓名判断をする啄木

『小樽日報』の創刊に参加した啄木は、三面記事の担当となる。編集を進める中で、紙面に姓名判断を掲載することを思い付いたらしく、引っ越してさほど間をおかない明治40年10月6日に海老名の部屋を訪れ、「初号に当地有志の姓名判断を書いて貰う事」を依頼している³⁴⁾。これをきっかけとして2人はしばしば行き来をするようになるが、日記には深更まで「姓名判断」³⁵⁾の話をしたことが記されている。

こうした中で啄木は自分の姓名判断も依頼したようである。同月17日の日記には、「天口堂主人より我が姓名の鑑定書を貰ふ、五十五歳で死ぬとは情けなし」とあって、本心からかどうかわからないものの、慨嘆の素振りを見せている³⁶⁾。周知のことだが、実際の啄木の生涯は、その半分にも満たない短さで閉じられることになる。

鑑定の当否や啄木の悲運はひとまず措くとして、彼はいったいどんなつもりで姓名判断を依頼したのだろうか。啄木はこれらの「運命説」や占いに信用を置いていたのだろうか。それとも、単なる好奇心から見せた暇つぶしや冷やかしの過ぎなかったのだろうか。もちろん、海老名に新聞の連載を依頼していたという行き掛かりも、その理由に加えなければならないかもしれない。

こうした疑問に啄木自身が答えているわけではないので、その本心を忖度するわけにはいかないが、当時の日記から見る限り、

それらの占いを迷信として初めから切り捨てていたわけではないということだけはわかる。啄木の心のうちには、占いの背後にある運命への畏敬と占い師に対する本来の意味での「同情」が垣間見え、彼と占いとの距離は思いのほか近いもののようであった³⁷⁾。

そのように推察させる例を日記の中からあげるとすれば、たとえば、小樽日報の同僚野口雨情に手相を見てもらったことを、「其云ふ所多く当れり」というふうになぜか記していることや³⁸⁾、さらには渋民時代に遡るが、家に招き入れた貧相な易者の観察から始まった連想が、世界の不可思議さや人間の矮小さといった高踏的な内容にまで駆け巡り、啄木から睡魔を遠ざけ、一夜を殆ど寝ずに過ごさせてしまったという出来事などを紹介できるであろう³⁹⁾。

しかしもちろん、だから啄木が占いの信者だったと言いたいわけではない。むしろ、海老名の大看板のせいで、隣に住む自分まで売卜先生に間違えられるのではないかと迷惑顔であったように⁴⁰⁾、啄木は占い師のことをけっして高くはみていない。渋民の易者の件でも、その風貌所作を克明に観察し、容赦なくその心底を見抜かんとする筆ぶりの後、「旅から旅へと心細くも、僅か五銭白銅一枚で、人の吉凶禍福を卜つて歩く運命の予言者!!!」と言い放っていることをみれば、啄木に売卜者を信心するような心持ちがあったとは到底思われないのである。

啄木はだが、易者を辛辣に見つめながらも、完全に否定し去ることはしていない。

「予は今夜、旅から旅に漂泊する、貧しく哀れなる売卜者をだに、一種畏敬の情を心に湛へて迎へざるを得なかった」とも、日記には記されているのである。啄木はその理由を、「何故と自ら問ふさへ心苦しい。世界は一の大なる謎ではないか」と問わず語りに答えている。つまり、旧来の「運命説」を迷信として克服したと称する近代の「科学の進歩」は、依然として世界を「解

き難き謎」のままにしているのであって、啄木にとって「運命」という命題はそのまま有効であり続けていたのである⁴¹⁾。

截然とこれを区別できるわけでもなく、そうすることは誤解を生みかねないが、少なくともこのとき啄木の心を捕らえたのは、先々の予見といった些事の「運勢」のことではなく、いままさに「運命」の司令である当の売卜者に襲い掛かっている抗し難い「運命」であった。いうまでもなく、それはいつ自分に降りかかってくるかわからないものである。彼が心中で易者に示した最低限の敬意とは、そのような運命に翻弄される境遇において苦悶する先達に対するものであった。

ここで付け加えておきたいのは、いま述べたような啄木の「運命説」に対する態度—信憑性の否定と行為としての親近性の混在—は、彼に限らず、当時の知的青年たちによく見られた傾向だということである。こうした典型を我々は、夏目漱石『彼岸過迄』の敬太郎に見る⁴²⁾。主人公の友人である敬太郎は、占いに信頼を置いているわけでもないのに、就職という自らの人生の大事をそれに託そうとしているのである。占いに対するこうした態度は、作品上だけでなく、漱石自身⁴³⁾や他の文士⁴⁴⁾の実体験に窺える。「運命説」への気分的吸引はまさに啄木個人の問題ではないのである。

言うまでもなく、こうした態度のうちには、前節で述べた「成功」—「修養」言説のうちにある正統的な自己開拓的な「運命論」と異端的な「運命説」との関係やそれが占める社会上の布置関係を読み取ることが可能である。啄木を始めとしてそれに引き寄せられた人々にとってそこで問題化しているのは、旧来の「運命説」や運勢判断そのものではなく、「切り開かれるべきものとしての運命」という新時代の観念を踏まえて、再認識(=再登場)した「運命説」なのである。いずれにしろ、ここで覚えておきたいのは、このような「運命説」

が当時の青年の傍らに控え、彼らに取り憑かんとしていたということである。

3 姓名学を鑑定する

ふたたび小樽に立ち戻って、今度は海老名又一郎に対して啄木がおこなった鑑定の方に拘っておきたい。啄木の眼差しから2人の社会上の類似性を確認し、さらにはそれを後に啄木が揚言した「時代閉塞」という現状診断と結び付けることは、小稿の関心である「運命」言説と社会的布置についての見通しを得るために重要な視点を与えると考えられるからである。それは「運命説」を唱える者とそれを受容する者が、どのような場所に居たのかということを知ることである⁴⁵⁾。

さて、啄木はこの姓名判断師をどのように鑑定したのだろうか。啄木の日記には、海老名について記した次のような評が残されていた。

「夕刻天口堂主人海老名又一郎君来る。一富豪のために其運をトして数十金を得たりとて新調の衣服を纏ひ、意気稍々快復せるものの如し、主人亦零落の人、赭顔漫ろに人生の惨苦を忍ばしむるものあり」⁴⁶⁾

海老名は姓名判断をもっとも早く世に問うた人物の一人であり、すでに明治31(1898)年には斯界嚆矢に数えるべき一書を著していた⁴⁷⁾。しかしながら、啄木と出会った当時は、東京を遠く隔てた小樽という新開地にまで流れついて、間借りをしながら糊口を塗らす暮らしぶりであった。啄木の目には、海老名が纏った新調の服も、その赤ら顔が忍ばせる「人生の惨苦」をいっそう際立たせるものとし映らなかったのだろう。いずれにしろ、「主人亦零落の人」と、啄木は鑑定した。

ところで、この「亦」に含意されるのが

零落した世間一般の人々だけではないことに注意したい。当時啄木が置かれていた状況からすれば、むしろ、それは他でもない彼自身を指していたと理解すべきだろう。同日の直前の箇所には、「多事に^{くる}困しむは無為の困しむの意義なきに優る」とあるが、啄木はこの何日か前に社内の内紛により失職が決定し、当て途なき無為の身になっていたのである。「天が下に墳墓の地を見出さざる不遇の浪人」⁴⁸⁾と自分を呼ぶほどに、啄木は「困しみ」のもっとも甚だしい状況におかれていた。要するにこの「亦」には、ともに一度は東京でチャンスを掴みかけながら、今では冷厳な世間の荒波の渦中でもがき苦しんでいる同類の人という含意がある。そして海老名ばかりでなく、北海道滞在中に啄木はたくさんの「零落の人」と出会うことになる。

知られるように啄木は、日露戦後のこうした困難な社会状況を「時代閉塞」として考察した。それは、この行き詰まりをもっとも敏感に受け止めざるを得ない世代が、彼を含む青年たちであったことに関係している。こうした事情を、啄木は青年を主語としたその悲憤の文章に次のように書き付けている⁴⁹⁾。

「… 毎年何百といふ官私大学卒業生が、其半分は職を得かねて下宿屋にごろ／＼してゐるではないか。しかも彼等はまだ／＼幸福な方である。前にも言つた如く、彼等に何十倍、何百倍する多数の青年は、其教育を享ける権利を中途半端で奪はれてしまふではないか。中途半端の教育は其人の一生を中途半端にする。彼等は実に其生涯の勤勉努力を以てしても猶且三十円以上の月給を取る事が許されないのである。無論彼等はそれで満足する筈がない。かくて日本には今「遊民」といふ不思議な階級が漸次其数を増しつつある。今やどんな僻村へ行つても三人か五人の中学卒業者がゐる。さうして彼等の事業

は、実に、父兄の財産を食ひ減す事と無駄話をする事だけである。」⁵⁰⁾

中途半端な教育を受け中途半端な一生を送りつつあったのは、他ならぬ啄木自身のことにはちがいないが、彼がここで指摘するように、それはむしろ青年の大多数であった⁵¹⁾。当時青年期を迎えた人々は、すでに述べたように、明治20年代半ば以降の初等中等教育の急激な拡大によってアスピレーションの種を蒔かれ⁵²⁾、さらには社会の産業化・資本主義化が巻き起こした実業ブームによって、新世紀に相応しい新たな産業を興せと唆され⁵³⁾、「成功」熱を煽られた世代なのである。それにもかかわらず、彼らは実際にはいくつもの「人間の篩」⁵⁴⁾に掛けられ落伍者と烙印された上に、最終的には自分たちが蔑む「腰弁」にもありつけない就職難の時代を生きなければならなかった。要するに、彼らの挫折は前代の貧困とはまったく異質な新しい社会現象であった。それまでの社会では普遍化しなかった野望の高みと現実との落差をまざまざと思い知らされる最初の団塊世代だったのである。啄木が「零落」という時、そこには、単なる貧困に止まらないそうした落差の意識が含意されていたことを見逃してはならない。

啄木の言うように、彼自身も、海老名又一郎も、零落者、つまり、失敗者であった。柳田國男は、「成功」という言葉が、じつはこうした失敗者のその後の経験を語る言葉であり、そこには様々な珍妙な「発明」がなされたと指摘している。彼らは地域社会の「選手」であったがゆえに、そのまま平凡に帰すことができず、再度の挑戦をさまざまな方策でもってしなければならなかったというのである⁵⁵⁾。実際、海老名は姓名判断の発明者の一人であり、それがそうした捲土重来の方途として位置づけられていたことには証拠がある⁵⁶⁾。

野望に満ちた啄木にとっての「発明品」

が文学であったというのは、ほぼ間違いのないところであろう。

4 啄木における運命観の変遷

やや筆を進めすぎたかもしれないが、いづれにしろ、文学であれ、姓名判断であれ、啄木も海老名もこうした成功熱に浮かされて新事業を起こし、敗れて、新開地である北海道にたどり着いた「青年」であったということは確かなのである⁵⁷⁾。

ただすでに確認したように、同じ培地にいたからといって、啄木と姓名学者の「運命」言説を同一に見なすのはもちろん誤りである。松山巖が正しく指摘するように、啄木は銀河のなかで動かない北極星を見据えて、希望を見つめて前進する若者であった⁵⁸⁾。「運命」に抗うように進み続けた彼の姿勢は高貴ですらある。しかしながら、啄木がすでに多少触れた「成功」願望の肥大化—「失敗」—「運命説」の隆盛という時代的潮流の遊泳者だったことも同様に間違いないのである。

ここで大切なのは、両者の「運命」の距離について測定してみることであり、さらに重要なのは、そのような運命観に言及すること自体に、「近代」を見定める上でどれほどの価値があるかを知ることであろう。

日記の中で啄木が使う「運命」という言葉は、多くの場合、自己の奮闘によって切り開かれるべき「運命」を指しており、それはスマイルズ以来の認識で捉えられた当時流行のマーデン⁵⁹⁾や島貫兵太夫⁶⁰⁾らに代表される勧説と同様のものと思われる。

たとえば、啄木は北海道に旅立つ決意をした際、「予は新運命を北海の岸に開拓せん」と日記に書き付けているが、「運命の開拓」ということばは、これらの著作によって当時通有な表現となっていたのであり、それはまた奮闘によって達成されるべきものと観念されていた。

その原型は啄木の最初の東京遊学を思い

立って記した日記「秋韻笛語」にある。劈頭「運命の神は天外より落ち来つて人生の進路を左右す」と自らの退学を「運命」として受け止めた後、未来の決意を記している。「運命は蓋し天が与へて以て吾人の精進に資する一活機⁶²⁾たるのみ。されば余輩はその翼に鞭うつて人生の高調に自己の理想郷を建設せんとする者也⁶³⁾」という高らかな宣言がそれである。したがって、東京の誘惑多き有様を目の前に見ても、啄木は「都府に於ける人の成功と否とは実にかゝる者と自己の胸中の成心との交渉との如何に存す」といい、そうした成心なき者は都市の実相の活動に身を投じて、志を得ずして髑髏に成り果てるという戒めの認識に留まっている⁶⁴⁾。逆に言えば、失敗者は自業自得であり、成心をもつ自分は失敗とは無縁の存在だという不遜がそこには認められる。

しかし問題なことに、啄木が思っているようには事は運ばなかった。東京においてほぼ1ヶ月間書き続けた日記も12月に入ると、俗事の繁忙と懐郷の涙とで殆ど書けなくなってしまう⁶⁵⁾。そしてついに翌年の2月には東京での生活も失意のうちに終わりを告げる。奮闘虚しく潰え去ったのであった。

最初の東京遊学における失敗が啄木個人に与えた影響を問う前に、退学から始まるこの冒険がすでに述べた「成功ブーム」の真っ只中におこなわれたことをまず確認しておかねばならない。これはけっして啄木のパーソナリティーに還元できる行いではないのである。啄木のような青年はきわめて多くを数えていたのであって、例外ではなかった⁶⁶⁾。そして、啄木がその一群に落ち込まないようにと記していたにもかかわらずそうなったように、その殆どは失敗に帰していったという事実がそこにはあった。このときの啄木の日記は「成功青年」の典型的な心情と独断によって固められていたが、多くがそうであったように、野望から

落胆へと推移している。人の不成功を自己に投影できないような熱病状況はブームと呼ぶにふさわしい社会現象であった。

では、最初の東京での挫折は啄木の運命観にどのように影響を与えたのだろうか。これまでの議論では印象論の域を出ないが、啄木は帰郷後、自分を失敗者に同定しているので、やはり「運命」の支配にやや重きをおく解釈に少しずつ傾斜していったのかもしれない。だがその後も、前向きな姿勢を失うことはなく、東京で得た人脈を頼りに彼は投稿を続け、年少の天才詩人としての地位を固めていく。明治37(1904)年10月末にはふたたび上京し、翌年には処女出版に漕ぎ着けている。

そうした着実な前進を遮ったのは意外にも家庭内の事情であった。同年12月末に父である一禎が宗費滞納により住職の地位を追われるという事件が起きたのである。詳しい経緯は省くが、啄木はこの「誰も知らぬ秘密の運命」(伊東圭一郎宛書簡)により、父の住職復帰運動を支えながら、代用教員として働くことになる。

このような不如意な出来事を経過した後、「秋韻笛語」に見られるような楽観的な奮闘主義が、啄木の心の中から退いていく。日記などの書かれたもので窺うかぎり、たしかに自己の才能に対する自信を失ってはいないが、先に紹介した易者に対する同情的な見方も現われ、動かしがたい「運命」という観念が頭をもたげてきていることは確かなようである。

見方を変えれば、自信と裏腹に好転しない「運命」であるがゆえに、啄木の人生において「運命」は重要なテーマになったといえるかもしれない。この時期、「運命」と人為の関係を、通俗的ではあるが、次のように明確に整理している。

「人間と神との連絡を是認し、運命を以て他界の勢力とせず、我々内在の根本性格の発動とするのが、此際に於ける唯一

の解答である、／運命は人間の根本性格である。そこで一切の「偶然の出来事」は皆「必然の運命」である。人は到底運命の手から脱する事は出来ない。運命は実に断てども断たれぬ永遠の鉄鎖である。然し乍ら、既に運命が他界の隔岸的な勢力でない以上は、我々はたゞ將に自己の運命を双肩に荷つて、一意奮闘すべきであるのだ、プルタークが鉄筆に上つた英雄も実に皆斯くの如き奮闘の人ではなかったか。」⁶⁷⁾

「一活機」という楽観主義は後退したとはいへ、相変わらず、「運命」に立ち向かう奮闘的立場をとっていることにちがいはない。それはそれなりに覚悟をもった立派な態度であり、また実際に啄木の自己認識で言えば、生涯を通じて一意奮闘し続けたという思いをもっていたことは確かであろう。また、こうした奮闘が英雄的な行為と結びつけて表象されていることは一つの特徴であろう。それは大業であり、達成されればまさに「成功」と呼ぶのがふさわしいような性質のものであった。

ただここでとくに注目しておくべきなのは、「秋籟笛語」の「運命」が修辭的なものであったのに対し、表現上のことであったとしても、「運命」が実体的な存在として語られていることである。啄木の人生において、「運命」がこのようにして、主題化されていったことは一つの転換として位置づけられるべきであろう。「運命」は「成功」の修辭句であることをやめ、下手をすれば、自分を奈落に落としかねない実存に変貌したのである。

こうした「運命」の主題化は、その後に起こる父親の出奔を契機とした生活の破綻により、生活と重ね合わせられていく。啄木には、家族の養育をも含めた生活の責任が負わされるようになり、文学方面の活動を諦めて、日々の糧を求めざるを得なくなった。啄木が目指すべき目標は「成功」で

はなく、生活の安定となり、向かうべき土地は東京ではなく、北海道に変更されたのである。

ただ北海道への移住が、運気を改善するということではなかった。函館の大火では自宅の類焼だけは逃れたが、小学校と新聞社の両方の職場を失っている。収入的にようやく安定したのは、釧路に単身赴任して以降の数ヶ月に過ぎない。

このように「成心」だけでは開拓できない存在としての「運命」を、啄木は痛感させられ続けてきたのである。信じたか否かは別として、宿命、「運命説」的「運命」が勝手に近寄ってきて、それによって侵されるような危機に晒されていたのである。

啄木が明治の文人としてもっとも自分に近いと認めた国木田独歩を⁶⁸⁾、キンモンスは「煩悶青年」の典型とするが⁶⁹⁾、両者の辿った「運命」には奇妙な共通点がある⁷⁰⁾。独歩が『運命』に収めた小説は、ほぼ同時期の短編を収録したものであるが、民友社の運命開拓觀的作品である「非凡なる凡人」から、どうもがいても天の作為からは逃れだすことのできない「運命論者」のような「運命」の支配をテーマとする作品までの拡がりを持っている⁷¹⁾。独歩における現実には蘇峰的な運命觀に収まらない思想を生み出していた。

たしかに啄木は独歩のような煩悶青年ではない。しかし、易者に対する同情から海老名との同一視へ、また修辭から実体へと移行する日記上の展開は、「運命」という存在の承認とその抗いがたさに気付いた様子を窺うことができるのではないだろうか。

『一握の砂』に「はたらけど／はたらけど猶わが生活^{なほくらし}楽にならざり／ぢつと手を見る」というあまりにも知られた歌がある。一方、これを雨情の手相判断に絡めて読む、殆ど知られることのない解釈がある⁷²⁾。その評価をおそらくは貶めるだろう解釈に与するのは躊躇がないわけではないが、いず

れにしる、「運命」の傲岸さを前にした者のたじろぎを見出すという点において、この歌の解釈は動かないであろう。

5 北海道というフロンティア

これまでの記述で、啄木の「運命論」、あるいは「運命説」との距離、そしてその変化について、およその内容は整理しえたかと思うが、啄木の「成功」への模索を語る上で、かつて北海道がもった「成功」における地政学的布置を確認することは重要である。北海道は「辺土」ではなく、東京への回路をもつ「成功」へのジャンピングボードであった。

経済史の石井寛治によれば、産業革命期に起きた地域経済の全国的な再編成において、岩手の経済は衰退し、人口流出が進行するが、その2大ルートは没落回避のための北海道への移住と立身出世を目指す東京への移住であった。啄木の移住の経験はともに、岩手県民の典型的な移動パターンであった⁷³⁾。

啄木が渡った頃の北海道は、困難を極めた開拓の初期を過ぎ、いわばフロンティアとして急激な発展を遂げつつあった。啄木が北海道で新聞社を転々としたのは、不安定な経営であっても、地方新聞社の設立が相次いだからである⁷⁴⁾。またさらに彼に敏捷な移動を可能にしたのは、明治40年中に完成をみた北海道の東西を結ぶ幹線鉄路であった⁷⁵⁾。

とくに小樽は産業革命期に入ると急速な発展を遂げ、道内の内陸生産物集散地としての地位を確保する。明治33(1900)年には開港場となり、日露戦争後は樺太を通商圏に含めるようになっていた。こうした小樽の発展ぶりを人口動態で示せば、明治維新当時の2千人程度が、明治30(1897)年には5万5千人弱、さらに明治39(1906)年末には9万人に迫る勢いを見せている。人口では、札幌を凌駕していたのである。

発展の最中にあった小樽は、商工業をはじめとして、忙しく働く人々の活気によって覆いつくされていたのである⁷⁶⁾。

啄木もそうした小樽の活況と可能性を認識していた⁷⁷⁾。啄木は小樽を「市」と呼ぶのが尤も妥当としているが、夜回りの金棒の響きから小樽の忙しさを、またその「声の荒さ」から身も蓋もない生存の営みを聴き取ったのであった⁷⁸⁾。「小樽人は歩行せず、常に疾駆す。小樽の生存競争の激甚なる事、殆ど白兵戦に似たり」⁷⁹⁾と、後年啄木は記している。

では、そこに集まるのはどのような人々だったのだろうか。小樽で啄木と同僚となった雨情は、そこに至るまでの身の上話を彼に語って聞かせている。啄木の日記によると、後に童謡詩人として名を馳せるこの男は、日露戦争中に爵位を狙って五十万金を献じて以来、失敗又失敗で、樺太に流浪して具に死生の辛苦を嘗めてきたとのことで、悪事のためには如何なる計画も成しうると言い放ったというのである。啄木も、これに好感をもち、「時代が生める危険の児」、「陰謀の子」、「わが党の人物」と評価している⁸⁰⁾。雨情一流の誇張に満ちた話であることに間違いはない。ただこの地に、そうした法螺話を真に受けさせるだけの雰囲気があったことを注意しなければならない。これに類した一攫千金を狙うような人物が啄木の周りにはごろごろしていたのである⁸¹⁾。

翻ってみれば、そこにある困難は旧時代においては想像だにできないものであり、新しい時代に開かれた可能性の中に生まれた困難だったといえる。彼らの中には、そうした可能性の拡大と共に欲望を拡大させ、当然とも言える失敗に遭遇し、捲土重来を目指す人々が大勢混じっていた。二十世紀をほぼ境として始まった新しい時代がこうした「危険の児」「陰謀の子」を生み出したのであり、そうした人々をもっとも吸引した場所の一つが北海道であった。

北海道のこうした雰囲気の中で過ごすうちに、啄木自身も大きく変貌を遂げていく。ようやく安定収入を得た釧路において啄木は新聞記者として健筆を揮うが、その生活ぶりは、初めて上京した時のような心掛けを失っていた。炭鉱と製材製紙によって潤ったこの町で、啄木は芸者遊びをし、愛人を作る生活に泥み、釧路に来て40日ほどの間に、借金も含めて「八十七円八十銭」を散じている⁸²⁾。こうした生活が、若き日の啄木が嫌忌した都市の実相の活動に投じた成心なき者のそれであったことは確認するまでもない。

啄木は北海道での失敗を振り返って、その生活は鋤と鋤、さもなくば網でおこなうものであり、「筆を荷ふて入るべき地には非ず」と紋切り型の言い訳を口にしてているが⁸³⁾、この言葉だけを取り上げるならこれほどの自己欺瞞はない。彼の生活ぶりや開拓案内の口絵写真が何頁にもわたって芸妓の艶姿で飾られ、さらに彼自身が「紅筆だより」という花柳界の消息記事を記すことになったのは、そうした常識が北海道のもう一つの側面を隠蔽していることを明らかにしている。こうして、釧路での新聞記者としての煤けた「成功」⁸⁴⁾は、啄木の東京に対する欲望をふたたび甦らせたのである。

6 文学的運命を試験する

啄木は家族を友人宮崎郁雨に預け、東京での「運命」にふたたび立ち向うことになる。これを啄木は知人への多くの書信の中で「小生の文学的運命を小気味よく試験する心算に候」と伝えている⁸⁵⁾。山本芳明は、これが原稿を活字メディアに売って生活する「文学市場の生産者」⁸⁶⁾としての「成功」を目指すことであったと指摘する⁸⁷⁾。啄木はどこまでも「成功」願望者であったことがわかるが、それは文学市場の形成という資本主義体制下において起きた現象なのである。それゆえ啄木は、自己の生産物

として、今度は詩ではなく、文壇で市場的価値が発見されてきた小説を選ぶことになる⁸⁸⁾。

そしてこの投企を、啄木は「運命」という隠喩でもって語った。なるほど、それは神秘的な「運命論」ではなかったかもしれない。しかし、それは平穏で地道な生活を望んでいる人々に襲い掛かってくるような「運命」でもなかったし、またそのように生きることじたい困難なことであった。それは資本主義編制の成立下において拡大する新しい世界とそこに見出された可能性に自らを投企(=投機)するような賭けであった。

しかし結果は惨憺たるものであった。啄木が心血を注いで書き上げた小説は、掲載する場をさがすことさえ容易ではなかった。彼は金田一京助という友を持たなかったなら、おそらくこのとき死を迎えていたに違いない⁸⁹⁾。啄木はその賭けに失敗したのである。

ただし山本によれば、作家が文学市場の生産者として生計を営めるようになる時期は大正中期以降のことであり、この当時にそれを望んだ啄木の失敗は必然だったという⁹⁰⁾。柳田は「成功」願望がさまざまな役に立たない新事業を立ち上げたと指摘するが⁹¹⁾、啄木の試みもその部類に入るといえるかもしれない。だが啄木の立場を弁護しておくならば、そうした試みは、資本主義体制が確立する過渡的な状況の中で、いわば過剰として行われた必然の事業であり、果敢に繰り返される泡沫的な試みは未発の可能性を秘めていたともいえる。ただ彼らはもっとも不利な地点から投企したがゆえに、失敗を繰り返すことになったのである。

この時、啄木にとっての「運命」とは、神島二郎が呼ぶところの「藤吉郎主義」という「修養」的な試みではなかった⁹²⁾。それは一か八かの生死を賭けた投企(=投機)だったのである。このようなエートスは露伴・咄堂の修養言説と対抗するように、

一貫してそれなりの場所を占めていた。その代表的な存在としては福沢桃介を上げることができる⁹³⁾。株式相場で大成功を収めた桃介は、聖人然とした成功者たちが語る成功談はすべて虚偽だと言い放ち、彼らが「成功」したのは、ただ「運」がよかったからに過ぎないとして、奮闘主義を唾棄したのである⁹⁴⁾。

奮闘主義に対するこうした破棄、修正、あるいは別要素の添加は、桃介がそうであったように、投資型経済の成長と結びついていった。明治43(1910)年に大阪で出版された福祿寿翁の『運命の開拓』は、似た名前もつ類書と同様に、「成功」への鍵を奮闘と品行に求めている⁹⁵⁾。しかしこの著者の主張が従来のもものと異なるのは、そうした主義に加えて、投機の重要性を説いている点である。福祿寿翁は、投機を株式や米相場だけのものではなく、普遍的な「人生問題」として捉えようとするのである。

「投機事業の発達は大に人生問題に関連する者たるを思ふものなり。蓋し人生五十年、七十を古希と称す、豈に短期と云はざるべけんや。而して此最短の期間中に最多の仕事をなすこそ、人生の一大主義にして、社会発達の理法は、一として此主義に根せざるなし。」『投機新論(人生問題)』⁹⁶⁾

この短期間の「人生」を満足せしめるものは金銭であり、その最大限の成果を上げえるのが、投機取引であるという。「現時投機熱の勃興し、定期取引所の頗る殷盛を極む所以なるべし」と述べる⁹⁷⁾。つまり、株式での投機ブームは、局所的現象なのではなく、機会が均等に与えられ、それを掴むことが「成功」の鍵となるような「完全なる自由競争の行はるべき理想的社会」にもっとも近付いている場所であり、現実もそれに向かっているというのが筆者のいう「人生問題」の根柢なのである⁹⁸⁾。

桃介も人生は「運命」を賭しておこなう投機であり、だから相場がいちばん面白いのだと、これとまったく同趣旨のことを述べている⁹⁹⁾。こうした発言が歓迎され、桃介のような人物が英雄視されたのも、それに対応する投機的な現実や、それを受け入れる世間的な風潮がこの時代にあったからだと考えるべきであろう。

もちろんだからといって、奮闘主義や通俗道徳が日本の資本主義を支えた重要なエートスであったということを否定しようというのではない。ただその一方でこうした投機的で進取的な精神が、近代日本の、とくに資本主義勃興期において大きな力となったことを見逃してはならないと言いたいのである。

いずれにしろ、これまでの運命観の検討から次のようなことは言えるだろう。つまり、啄木は「運命」の開拓を宿命的に背負っていた。それは奮闘的な側面をもつと同時に、投機的な側面をも持ち合わせていた。彼は柳田言うところの「選手」であったがゆえに、度重なる「失敗」にも、捲土重来を目指さざるを得なかった。啄木の「運命」に対する態度はその場その場において強調点を異にしていたのである。

このような啄木の経験を見てくると、「成功」－「煩悶」－「修養」という言説空間は、「運命」ということばを加えることで初めて全体像が鮮明になってくることがわかるだろう。こうした言説空間はたしかに歴史的に形成されてきたが、その関係はけっして一方向の不可逆的なものではなく、相互に対抗・相補し、影響を与えていたことが理解できる。限定された視野からであっても、人々はそれぞれの社会的、実践的布置に照らし、適合すると思われる言説を構築していった。それらは実践の資源であると同時に、まさしく実践そのものであった。

新時代の「運命説」は、このような言説空間においてこそ自らの場を得たといえる

だろう¹⁰⁰⁾。啄木を始めとする多くの文士たちに見られる「運命説」への吸引は、たとえば奮闘的な修養主義といったマスターナラティブとの間にしばしば引き起こされる不和の表現であり、その隙間に囁き掛ける「投機的運命論」と連絡したものだといえないだろうか。

また、こうした傾向が文士たちに多く見られる背景として、その社会的地位の両義性を想定することはそれほど無理なことではないと思われる。この時代において、彼らに対する評価は、自己評価も含めてきわめて不安定だったと考えられるからである。文壇において起きた構造の変化は、社会的名声・経済的成功・同業者間の評価に整合性をもたない混沌をもたらした¹⁰¹⁾。

いずれにしろ、啄木にとって東京に出ることは、「運命」に対する投企（＝投機）であり、それはこの時代の一つの動向と一致した生き方だったのである。

7 隠蔽された「運命」としての結核

周知のことだが、啄木が試みた人生という賭けは、結核という病魔によって挫折を余儀なくされる。『悲しき玩具』の冒頭を飾る「呼吸をすれば、／胸の中にて鳴る音あり。／^{こがらし} 床よりもさびしきその音！」¹⁰²⁾は、その終結を記す墓碑銘となった。かつて北辺の町で不吉な予兆として恐れた者の声を、彼はついに自らの内より聞くようになったのである。

だが啄木は、自分が結核であることを最後まで否認し続けた。ひとつには、結核が死病と呼ばれ、死の刻印とされただけでなく、伝染や遺伝といった虚実入り混じったイメージを帯び、世間から忌避される対象とされていたこととも関係があったと想像される¹⁰³⁾。ただそれにしても、啄木の結核に対する恐れは極端なものであった。近寄ってくるその影をことごとく忌避し、隠蔽することで、啄木はそれを否認し続けた。

その態度はまさしく抑圧と呼ぶに相応しい¹⁰⁴⁾。

これまで啄木と「運命」とのかかわりについて見てきたが、こうした態度はそれとはかなりの距離がある。啄木は、「運命」についてははっきりと語り、自覚的に立ち向かう態度を示してきた。啄木は「運命」を語る言葉と態度を持っていたのである。それに対し、ここで言及する「運命」、すなわち、自分を死に追いやるとうする結核については、その反対に啄木は何も語ろうとしない。以下の論述の中で明らかにするが、その忌避と隠蔽は一貫しており、これまでの「運命」に対する態度の極北にある。彼はしばしば死にたいと願望したが、実際の死の床にあたっては、それをしっかりと見つめていなかったように思われる。1年以上にわたる闘病生活において、たしかに死を恐れる歌を作ることもあったが、その正体を暴こうとしなかったし、それについて書くこともなかったのである。

啄木の運命観の全体像を語るためには、少なくとも、この饒舌と沈黙の2つを視野に入れなければならないであろう。したがって、この節では、この結核という「運命」に対する啄木の一貫した態度に焦点を当て、次節での啄木における運命観の総体を明らかにするための準備としたい。

啄木の最期は、彼だけでなく、一家が揃って病魔に侵されるという惨状の中で迎えられた。妻に続いて母も結核特有の症状を呈し、現在の我々の常識からすれば、すぐさま家族内感染を疑わなければならないものであった。

そうした中で、肺病との断定を最初に受けたのは、もっとも遅くに明白な症状を現わした母親である¹⁰⁵⁾。この診断が告げられた日の日記に、啄木は次のように記している。

「咯血したからこそ『或は…』と思つてゐたものゝ、これは私にとつては全く初

耳だつた。しかし不幸にして私は、医者
の言葉を証拠立てる色々の事実を知つて
ゐた。母がまだ十五六の頃に労性乃ち今
の肺病をわづらつたといふ話も母の口か
ら聞いた事があつたし、そればかりか数
年前から、母は左を下にして寝れば咳が
出て眠れないと言つてゐた。さうして去
年私の入院中にも母は多少咯血したこと
があるさうである。……私はまた長姉の
死因についても考へなければならなかつ
た。」¹⁰⁶⁾

母が「もう何年前よりと知れない痼疾の
肺患」に罹っていたと医者に告げられた啄
木は、それを「証拠立てる色々の事実」を
はじめて想起するにいたる。逆に言えば、
医者から告げられるまで結核とは思わな
かつたというのである¹⁰⁷⁾。こうした「見誤
り」について、医学的知識の未発達の状態
では仕方がないと受け止めるのが一般的な
解釈とされている。

しかし別の解釈、つまり、そこに結核の
否認を読み取る解釈もありえるのではない
だろうか。まず、啄木が入院して以降、家
族が続けざまに類似的な症状を出現させる
中で今回の母の病変が起きたことや、想起
されたような過去の事実の存在は、その証
拠の一部であるが、それは他に母の病変に
ついての啄木の観察などからも窺える。啄
木は、母の出血について、21日の日記で
「吐血」と記している。言うまでもないが、
正しくは「咯血」とあるべきところだが、
啄木はこれを胃からの出血と見なしたとい
うことを示している。ところが、19日の日
記には、すでに「二三日前から時々痰と一
しよに血を吐くようになつた」とある。咳
とともに出血し、痰の中に血があるのだから
「咯血」に間違いのないのであり、啄木は
そのことを知っていた。

これを単純に無知のせいにすべきではな
い。ここに並べた兆候は、当時の知識にお
いても、それをつなぎ合わせることで、す

ぐさま結核を想起してもよいようなものば
かりであつた。したがって、ここで問うべ
きは、そうした想起を働かせない心的傾向
のほうであり、啄木の場合ありえないよう
に思われるが、それがたとえ無知によるも
のだとしても、むしろ問題は、認知を制限
し無知の儘でいさせる防衛機制にあったと
見るべきではないだろうか。

啄木の母は1月中旬頃から1週間ほど血
の混じった痰を吐き続け、酷い時は御飯茶
碗2杯も血を出しているのである¹⁰⁸⁾。こう
した決定的ともいえる有様を目の当たりに
しても、その事実が受け入れ難かつたのは、
「母の病気が分つたと同時に、現在の私の
家を包んでゐる不幸の原因も分つたやうな
ものである。私は今日という今日こそ自分
が全く絶望の境にゐることを承認せざる得
なかつた」¹⁰⁹⁾と日記に記すように、母の病
気を認めるということは、それがそのまま
これまで否認し続けてきた自分たちの病の
正体に対する冷厳な最後通告とその受諾を
意味したからであつた。すなわち、「私が
かうして一年も直りかねてゐたのも、つま
りは結核性の体質だつたからでせう」¹¹⁰⁾と
認めることである。

しかし、佐藤北江へのこの手紙は、すぐ
さまこう続けてある。

「尤も私の病気はまだ肺結核にはなつて
ゐず、肋膜の患部に近い部分にラッセル
が聞えるだけの程度だと、これについて
も昨日の医者は二人共同じ事を言つて行
きました。」¹¹¹⁾

自分は「結核性の体質」であつて、「肺
結核」ではない。そのことは2人の医者が
保証したことだという。明治43年12月以降
に限っても、長時間の風邪薬の症状、慢性
腹膜炎、肋膜炎、間歇熱（「日嘔潮熱」¹¹²⁾）、
盗汗、咳嗽など、約1年にわたる特有の病
状が、結核の着実な進行であることは、も
はや誰の目にも疑いようもないというのに、

である¹¹³⁾。

こうした否認が抑圧の機構とつながっていたことを示す証拠を、我々は啄木の言行から見出すことができる。

妻の節子が体調を崩したのは、啄木の入院から5ヶ月ほど経った明治44(1911)年の7月中旬であった。28日には、肺尖加答児と診断を受け、伝染の危険があると医者から告げられている。あるいは病人たる自分の姿を鏡で見るように思われたためか、啄木は、病状が思わしくなくて醜悪な姿を見せる節子に対し不愉快な気分を募らせていった。母親の症状がでる10日ばかり前に、啄木は節子の咳がきっかけで怒りを爆発させる。寝入りばなに烈しく咳をする妻に対して、啄木はこう言い放つ。『咳の薬を買って来るが、のむか、のまないか』。明日自分が買ってくると答える妻に対し、『いや。おれの親切はお前にはうるさいやうだけれど、お前のその咳をきくとおれは気違ひになりさうだ』と言って、病身をおして寒い風の吹く中を咳の薬を買いに出掛けていく¹¹⁴⁾。

節子の実家との関係や親友郁雨のことなどが、二人の間にすでに大きな亀裂を生んでいたことは指摘されているとおりであるが、啄木の爆発のきっかけが咳であったということは暗示的である。

こうした事実は、他にもある。たとえば、明治45(1912)年1月4日に、啄木は久しぶりに友人の並木武雄と会う。しかし、頬が削けて顔色も悪くなった並木が、さらに肺病を恐れながらも、大言壮語するさまをみて、嬉しいのとは反対の心持になってしまう¹¹⁵⁾。啄木は「肺病に脅かされてゐる無資本の彼が、さうした空疎なアスピレーションを真面目に考へてゐるといふ事」を「面白い」と感じたと言うのであるが、憂鬱さの所以はその姿を自分と重ね合わせずにはおれなかったからではないだろうか¹¹⁶⁾。

このように啄木は、結核を連想させるものを極端に恐れ、避けている。彼は自分が

結核であるということを知らなかったのではない。知りたくなかったのである。

だが、このような抑圧の存在を、啄木自身がまったく気付いていなかったわけではない。母が咯血し家中が病人となってしまった時、絶望の大きさから妻に向かってこう叫ぶざるを得なかった。

『おれは去年の六月、とう／＼お前が出てゆかない事になつた時から、おれの家の者が皆肺病になつて死ぬことを覚悟してゐるのだ。』¹¹⁷⁾

当然啄木は、節子が十代の頃に結核に感染していたことを知っていたのであろう¹¹⁸⁾。いずれにしろ、薬も切れ、母をも医者に見せられない切羽詰った状況の中、そうした抑圧の扉が破られたと解釈できなくはない。しかしそれも一度きりで、扉はふたたび固く閉じられている。彼は最期まで自分の死を認めようとしなかった¹¹⁹⁾。

おわりに 一主体の物語としての「運命」

漏れ聴こえる咳に対する恐れを兆候として読みとくことから始めた小稿の探索は、ようやく啄木の人生における結核の意味を考え、さらにはそれを同時代の言説空間に位置づけようとするところまで辿り着いた。ここでは、啄木における結核の否認(他者化)を、それとは対極にある結核のロマン化言説、さらには彼の「運命」に対する言及とに関係づけ、最終的には日本産業革命期の「運命」に関する言説空間と主体形成の問題として捉えていくことになる。

こうした仮説的な見通しは、筆者が当面の課題とする近代における異端的実践(知)において、そこに参与する主体がどのような社会関係の網の日や言説空間に置かれていたのかという問題を検討するための基礎となるものでもある。

啄木にとって結核とは、単に死をもたらすというだけでなく、彼の人生を意味あるものにしている物語を破壊する存在であっ

た。彼がこれほどまでに結核を隠蔽し、とうとうその侵入が否認しようもない事実とわかったとき、絶望の叫びを上げなければならなかったのは、まさしくそれが意味の死だったからである。そのような死をもたらしたのは、それと同様に医学的な存在としての結核ではなくて、あらゆる破壊や嫌悪を受け付けてしまうような隠喩によって構成された肺病であった。だから啄木は自己の結核について沈黙し、その経験から切り離す「他者化」をおこなったのである。啄木は発病した母について、長く生きられては困る、母の生存が私と私の家族のために何よりの不幸だと記している。啄木にとって、結核はどこまでいっても「他者の病」だったのであり、自己の病についての隠蔽・沈黙は他者化をおこなうための1つの方法であった。

しかしながら当時、結核が語られなかったということではない。事態はむしろ逆である。啄木が身をおいた場所とは別のところで、結核やその患者に関するセンチメンタルな物語が饒舌に語られていたのである¹²⁰⁾。そしておそらくは『不如帰』こそがその頂点であった¹²¹⁾。明治33(1900)年に単行本化されてから10年目には100版を出すほどの人気を呼び、徳富蘆花の地位を決定付けたこの作品が、結核の新しい意味を普及させるために果たした役割はまったく革命的なものであった。『不如帰』の成功以降、結核は天与の美・才能・高貴といった意味を纏い、実際の結核患者の姿からは懸け離れたイメージを付着させていくことになる。いわゆる結核のロマン化といわれる現象である。

このように明治末期の結核に関しては、沈黙し他者化に向かう傾向と饒舌に語り美化するロマン化の傾向という対極的な隠喩がまわり着いていたのである。では、時代が内包するこうしたアンビバレンツは、いったいどこに由来しているのだろうか。またこの隠蔽と饒舌は無関係のものである

うか。

ソntag以降の、医学史の「文化論的転回」¹²²⁾で注目されてきたのは、結核のロマン化の方である。ソntagは「他者の病」である癌との対比において、結核が「自己の病」であるとした¹²³⁾。個人と社会がもつ内なる無形の不安をこれらの病気と患者に背負わせて境界を引くことで他者化する「他者の病」に対し、自己を肯定的にアイデンティファイするのが「自己の病」であるというのである¹²⁴⁾。だがこの観点からいえば、すでに指摘したように、啄木にとって結核は他者化されるべきもの、すなわち、「他者の病」である。

もちろん、啄木の結核との格闘が同時代の結核のロマン化の存在を否定することにはならない。確認になるが、そのような隠喩は並存していたのである。したがって、ここで重要なのは、この大胆な二分法を特定の病に当てはめることではない。結核自体がそのような隠喩に初めから染め分けられているわけではないのである。言うまでもなく、そのような意味(、すなわち、関係)は、それがどのような社会的文化的文脈に置かれるか、そして何よりも、どのような言説空間のどのような場所に配置されるかということにかかわっている。

であるならば、結核におけるロマン化と他者化がどのような言説空間においておこなわれていたのかを問わねばならないだろう。

結核がどのようにして、なぜ「美化」¹²⁵⁾(以下、ロマン化)されたのかについて、18世紀イングランドの事例から検討した鈴木晃仁によれば、そこには次のような過程があるという。当時、結核と類似する消耗した身体をまとして、フィクションの世界に入り込むことが人々の間で流行し、それが自己形成の仕掛けとしてもちいられるようになったが、その一方では、消費社会の誕生と拡大にともなって、広範な人々が高い質の芸術を享受するようになっていた。

それに相関するかたちで増加した高い読解力と想像力をもった読者層は、自己と文学作品を重ね合わせるようになるのだが、その望ましい身体像に結核と親近性のある身体が選ばれたというのである。「フィクションとの同一視のためのボディ・プロジェクトの仕掛けとして結核に病む（あるいは病んでいるような）身体の獲得が広まった」¹²⁶⁾のである。

あくまでもこれは18世紀のイングランドの場合であり、まったく社会状況の異なる明治後半の日本にどの部分がどれほど適合するかということは簡単ではないであろう。しかし、ここで注目したいのは、このようなロマン化が読書という消費文化と大きくかかわっているという指摘である。いうまでもなく、日本の場合、『不如帰』やそれ以降のいわゆるサナトリウム文学がこうしたロマン化に決定的な役割を果たしたことは間違いない。これまでロマン化という用語は、それが表象レベルのことなのか、実践レベルのことなのか、あるいはその両方を指すのかといった点できわめて曖昧なまま議論が進められてきた節がある。結核を主題化した作品を読むこと、積極的に結核になること、結核ではないが結核的身体と表象されるような身体になること等などは、つながっている場合もあるが、実際にはすべて別のことである。そうであるならば、この消費文化における読者の誕生という共通点の存在は強調されてしかるべきであろう。

鈴木とは別に、広い意味での歴史的（＝「起源」）観点を導入して、ソントグの「隠喩としての病」論に本質的な異議を唱えたのが柄谷行人である¹²⁷⁾。柄谷は、結核のロマン化が近代の知の転換と深いかわりがあることを指摘する。まず柄谷はルネ・デュボスに依拠しながら、『不如帰』が近代的な「特異的原因論」によって支えられていることを見つけだす。つまり、明治20年代に確立された近代医学の知的体系に

よって個人の病識を超えた客観的な病気が存在するようになり、そこにそのような悪＝結核菌が発見されたというのである。つまり、こうしたロマン化とは、結核の物象化を通じておこなわれたその反対側にある主体の美化・物語化であり、結核の悪意が増大すればするほど、それに翻弄される半＝主体の美化が進行するという関係がそこにはある。

ただ柄谷の指摘で重要なことは、そのような結核のロマン化と主体の生成という問題に尽きるものではない。柄谷は、隠喩化したものでなく、事実としての結核そのものが解読されるべき社会的・文化的徴候なのであり¹²⁸⁾、その拡大が産業革命における生活形態の急激な変容とともに引き起こされているという事実を指摘する。それらは近代の編制により起きた複雑な諸関係の網目のアンバランスに関係した現象であり、けっして単一的な原因で説明されるようなものではないのである。

たしかに結核のロマン化が進行する時期とその流行の拡大時期は重なっている。しかしそれは柄谷が指摘するように、後者のために前者が起きたのではない。それはむしろ、効果の点で言えば、ロマン化の進行がそのような悲惨な現実を見えなくさせてしまったということが言えるかもしれない。ロマン化が消費社会における読者の誕生と関係しているとするならば、『不如帰』の読者が自らをロマン化するとき、その舞台は上流階級であることが必要であったし、紡績工場は隠されてしかるべきであった。柄谷は柳田國男を引きながら、『不如帰』の世界は父系的家族制度を強化する継子いじめ譚であり、まったく新派に相応しい作品であるといっている。

以上の簡単な検討から、日本近代における結核のロマン化を受容した層について推測してみれば、それは消費社会の誕生と拡大の中でその消費者たる読者としての役割を果たす（狭い意味で）非政治化された主

体であるというイメージが浮かび上がってくる。もとよりこれは仮説的な見通しに過ぎない。これを検証していくためには、現在蓄積のある作品・作家論ばかりでなく、むしろ読者論、さらには文学芸術というジャンルを超えてどの程度ロマン化言説や実践が浸透しているのかを検討していく必要があるだろう。

結核の他者化と同時代の言説空間の関係について見通しを得るために、ひきつづき啄木の事例から考えてみたい。これまで検討してきたように、産業革命期を中心に、資本主義体制を中核とした近代的編制が成立する過程で、「成功」「煩悶」「修養」、そして「運命」などのことばによって織り成された言説空間が創出されてきた。啄木の運命観は、こうした言説空間に場を占めていた。彼はそこで「成功」や「運命開拓」を目標に掲げ、あるときは奮闘し、あるときは投企をおこないながら自らの「運命」を試験してきたのである。

この言説空間において、彼は自己の人生を構築していったと思われるのだが、けっきょく啄木は結核について語る場をそこに持たなかった。というのは、結核の他者化とは、隠蔽や否認によって人生の意味への侵入を防ぐことだったからである。それはけっして自分の人生には起こらない出来事である。この点は、啄木の運命観を検討するうえでかなり重要だと思われる。なぜなら、啄木は「運命」に果敢に挑戦し、敗れ去っても、それを英雄的行為として受け入れる旨を吐露していた。しかしいま見たように、そうした敗北のうちにこの結核という病は想定されていなかったのである。自らのまわりに、この戦いの夥しい敗北者を目の当たりにしていながら、そのもっとも深刻な闘いを「運命」の中に数えあげないというのは、特別なことであろう。

しかしながら、これは何も啄木に限ったことではなかった。病といった抽象的な言及はあるにしても、同時代における運命開

拓的な言説の中で、老病死は、その位置を占めることはなかったのである¹²⁹⁾。さらに当時の青年層を襲い、その人生を中絶させる死病と表象されたにもかかわらず、結核に言及されることもなかった¹³⁰⁾。なお、付け加えておこならば、こうした結核の隠蔽が社会的な慣行となっていたということも指摘しておこう。医者と患者、さらにはそれを取り巻く人々との共謀により、結核という診断を下さないことが常套化していた¹³¹⁾。結核は、そのような意味で「見えなくされた運命」であった。

こうした結核の他者化言説とロマン化言説について得た知見を総合してみれば、どんなことが見出せるだろうか。まず何より確認しなければならないのは、それが産業化した近代の主体によって実践されていたという点であろう。前者の置かれた場は、成功言説をはじめとしていくつかの言説によって構成される言説空間であり、そこに生きる者たちはそれぞれの社会的布置に応じて学歴などの象徴資本を武器に実践を創造していると思われる。そうした中で、結核の他者化言説は、その不在証明により、容易に陥るであろうところの危機を隠蔽する役割を担っていたと想像される。一方、ロマン化と関係するような主体は、新たな消費社会の中で、趣味としての読書や上流階級的な肉体やファッションを身につけることで卓越化を図っていたことが想像される。

こうした想定をしてみれば、次に、それらの関係がどのようなものであったのかということが新たな課題となってくるが、それは小稿の範囲を超えている。ただ少なくとも、それらは資本主義下の主体が示す生産と消費という側面の現れであったこと、次にそこには結核に代表されるような悲惨を正面から見据えようとする視点を見出せないということなどが指摘できるかもしれない。後者の点に関して言えば、そこには美化であれ、無視であれ、結核を「社会問

題」として捉えようとする一部の社会主義者たちのような視点は存在しなかったのである¹³²⁾。

このようにして困苦を放擲した主体は、その人生においてそうした不幸が現実のものとなったとき、どこに救いや置き換えを求めることができたのであろうか。おそらく「運命説」に対する検討もそのような排除された問題群とのかかわりで検討される必要があるのではないかと思われる。

いずれにしろ、以上の議論から派生して言えることは、こうした主体に必要とされた「運命論」・「運命説」が、近代以前のものとはおのずと異なっているだろうということである。外貌は似通っているかもしれないが、その正体は新たな主体にふさわしいものに改変されている。このような観点は、とくに近代において異端的と思われる実践（知）、たとえば占いなど、を検討していく場合に重要となる。それらはいかにも古めかしい格好をして登場してくるが、それは近代的主体に対応した内容を備えていなければならないのである。

以上でおおよその内容については検討し終えたが、冗長にわたった気味があるので、最後に本節をまとめておきたい。

啄木の結核経験は、当時隆盛であったロマン化言説とは対極の自己の経験からの切断に終始していた。つまり、近代においては、結核という病にロマン化と他者化という2つの隠喩が働いていた。しかし、この隠喩はまったく別物ではなく、両者の誕生には近代の主体形成がともに深くかかわっている。まずロマン化の起源がどこにあるのかという問いに関しては、2つの解答が見出される。1つは、消費社会の誕生と拡大にともなう文学作品と自己を重ね合わせることのできる読者＝消費者の誕生であり、2つ目は、さらに根源的な事象に属するが、近代的制度知である医学による想像の主体の創造とその鏡像である主体の形成である。つまり結核のロマン化は、読書という消費

文化の中でナルシズムを享受する主体の物語として受容されたのである。ではもう一方の他者化はどのような文脈の中で成立したのだろうか。近代医学による結核菌（＝伝染性）の発見や、社会政策が囲い込み、さらに隔離する結核患者像が、他者化のまなざしの基礎にあることはいうまでもないが、日本の産業革命期において重要なイデオロギーの場となった成功言説空間では、初めから老病死に関する言説が排除されており、そのような言説空間において生きる主体はそれを語る方法を持ち得なかったとすることができる。要するに、ロマン化も他者化も、近代の資本主義と深くかかわった言説空間において実践を構築する主体の実践であった。そして、異端的知や実践もこのような実践の場に場所を占める主体によって経験されるものであった。

注

- 1) 「明治四十丁末日記」（『啄木全集』第五巻 筑摩書房（1967）p.170。啄木全集の引用は、以後、巻数と頁数のみで表記し、必要に応じて、年月日を付すことにする）。啄木の事跡についての記述は主として彼の日記によったが、伊藤整『日本文壇史10 新文学の群生期』（1996）、同『日本文壇史12 自然主義の最盛期』（1996）、同『日本文壇史13 頽唐派の人たち』（1996）、同『日本文壇史14 反自然主義の人たち』（1997）、同『日本文壇史18 明治末期の文壇』（1997）以上、講談社文芸文庫、倉田稔『石川啄木と小樽』成文社（2005）、波越重隆『小樽案内』札幌博光社（1908）などにも依拠している。
- 2) 福田真人『結核の文化史—近代日本における病のイメージ—』名古屋大学出版会（1995）。
- 3) 福田前掲書 p.80に引用されている森鷗外への母の言葉や、小説という創作物であるが、田山花袋の『田舎教師』（左久良書房（1909））の主人公清三が肺病だとわかった時に、足袋屋の細君が言う「何うも咳嗽（せき）の出るのが変だと思つてました」（p.516）という言葉はそうした事情を語っている。また、当時の結核解説書には「患者ヲシテ特ニ不安ノ念ヲ生ゼシメ医者ノ許ニ来タラシムルモノハ咳嗽、咯血ナリ」

(岡本敏行編『肺結核』最新医学月報社(1904) p.34)とあって、その他の症状以上に、咳は「肺病」を予感せしめるものであった。そして、啄木自身の作品で言えば、『我等の一団と彼』(『啄木全集』第三巻(1967)所収)の登場人物である松永という新聞社の画工の肺結核の病状の中にも印象的に使われている。

- 4) 福田は前掲書で、結核に取材した啄木の短歌を検討し、そのイメージについて分析している(pp.142-8)。
- 5) 1906年2月25日、長姉・田村さだ死去。長姉の死の様子を伝えた義兄の手紙は、啄木をして「不運は我が一族を呑んで了つて居る」と書かせることになる(全集第六巻 pp.375-6。1906年3月19日)。また、咳ごときで、結核を恐れるというのはいささか穿ちすぎではないかという見方もある。しかし、啄木は結核恐怖に取り憑かれていた。ただ左胸が痛く、頭の加減がよくないというだけで、「予は心配した、あゝ、肺病になるのか?」と日記に記している。結局これは筆をとる時、胸を机の角で圧迫していただけだと納得している(全集第五巻 p.114。1906年11月19日)。
- 6) 全集第五巻 p.170。海老名は後述するように、明治31(1898)年に姓名判断に関する著書を著すなどして、近代姓名学の誕生期に活躍した人物の一人であるが、息長く活動を続け、大正初期の姓名学ブーム時にも新聞で報道されるなど斯界では有名な存在であった。
- 7) 全集第五巻 pp.84-5。1906年3月26日。小稿2節を参照。
- 8) ここで近代と呼ぶ定義不能のものは、おおよそR・バウマンの「近代は、商工業資本主義の台頭、近代都市と近代国家の成長、自然主義的、世俗的世界観の出現、また、我々が近代と呼ぶものが持つその政治的、社会的、知的要素のすべてを指す」(リチャード・バウマン「アメリカ民俗学研究と社会変容」岩竹美加子編訳『民俗学の政治性—アメリカ民俗学100年目の省察から—』未来社(1996) p.233)という「説明」によって辛うじて指示できるような内容を意味している。
- 9) 小稿がとりあえず検討の範囲とするのは、1901年以降から明治の終焉までを中心とした前後の時期である。この時期の社会論として重要な見解には、岡義武「日露戦争後における新しい世代の成長」(『思想』第五一二号、第五一三号(1967))があるが、小稿では日露戦争の影響以上に、産業革命の意義を重視している。日

本の産業革命のアウトラインに関しては、石井寛治『日本の産業革命』朝日選書581 朝日新聞社(1997)。

- 10) 日清戦争前後には高島嘉右衛門の活動が盛んに報道され、姓名判断の最初の流行は、明治30年代半ばにその始祖佐々木盛夫の登場によって起こった。疑似科学である骨相学の大衆への浸透が始まったのも、ほぼ同時期である。とくに高島は易聖と呼ばれ、売卜者の教祖的存在に祭り上げられた。2節で言及する啄木が会った易者も、嘉右衛門の肖像写真を奉持して礼拝をおこなっていた。なお、嘉右衛門を中心に近代の占いの権威化について検討した業績として、鈴木健太郎の「占い本と近代—商品化された知の権威をめぐる—」(島蘭進・石井研士『消費される〈宗教〉』春秋社(1996))がある。
- 11) 「成功」が明治の新語(新熟語)であることを逸早く指摘したのは、柳田國男であった(朝日新聞社編『明治大正史・4・世相篇』朝日新聞社(1931) p.383、小稿p.40参照)。また、一見漢語に思われる「修養」も、明治に発明された新語であり(王成「近代日本における〈修養〉概念の成立」国際日本文化研究センター『日本研究』29号(2004)同「修養書における大衆啓蒙をめぐる」『文学』2006年3、4月号岩波書店)、「煩悶」は知られるように、明治36年の藤村操事件以降の流行である。こうした新語によって構成された言説空間において「運命」の意味も変貌した。それゆえ、ここで新語というのは、まったく新しく創造されたというだけの意味ではなく、それまでとは異なる語義ニュアンスを以って新たな状況を表出・出現させる働きをもつ点を指標としている。したがって「運命」が、古今東西を問わず、つねに言及される対象であり、それを指す言葉があったことを否定するのではない。実際、その用例は、『平家物語』などにも見られる。しかしながら、本論でも詳述するように、明治後半のそれは、輸入された運命の開拓という個人の主体的な奮闘を前提としてその対応関係の中で展開された近代的な現象であったことを確認する必要がある。なお、柳田の新語論の可能性については、佐藤健二『歴史社会学の作法』岩波書店(2001)参照のこと。
- 12) E・H・キンモンズ『立身出世の社会史—サムライからサラリーマンへ』玉川大学出版部(1995)原著Earl H. Kinmonth: *The Self-Made Man in Meiji Japanese Thought 1981*、竹内洋『立身出世主義—近代日本のロマンと欲

- 望』NHK出版(1997)、竹内洋『日本人の出世観』学文社(1978)。
- 13) 成功ブームに関しては、竹内前掲書(1978)、キンモンス前掲書「5章 成功青年」。成功ブームに関するこれまで記されたことのない証言を以下に紹介しておく。「今日の新聞雑誌を見ると、成功成功と、何ぞと云へば成功談、余程成功談の隆盛の時代だ。先ず、一寸成功談でなくては夜の明け兼ねるでもあるやう、驚いた時勢だ。併しそれは先ず宜しいとして、さて成功談中の主人公はと吟味して見ると、是れこそ愈々以て驚かされるではないか、猫や杓子の御親族でもあるやうな連中が、何某氏の立志談、何の誰君成功譚など、堂々として擔ぎ廻はられて居る凄じさ。此の調子では、酒屋の樽拾ひと其辺の立ん坊も、うっかりすると今に成功談中の人物だ。」池田謙三述『財界活動 実力養成の秘訣』大学館(1912) pp.25-6。
- 14) 天野郁夫『学歴の社会史—教育と日本近代—』平凡社ライブラリー(2005) pp.213-6、pp.251-3。
- 15) 明治20年代以降に繰り返される企業勃興は、じゅうぶん裏付けのない多くの試みを生み出した。そうした指摘は、徳富蘇峰(「虚業家」『国民の友』第131号(1891. 9月))や中江兆民(「虚業家」『四民の目ざまし』(1892) pp.89-96)にすでに見られるが、日清日露戦間期の社会状況を風刺的に描いた「社会小説」でその実態を詳細に描写したのは内田魯庵であった。魯庵は『虚業家尺牘数則』において、実業家とは名ばかりであることを示し、また、『青年実業家』では、その実業家に「戦争以来実業が勃興したといふのが間違っている。何が勃興してゐるもんか、更に進歩しないと云つても宜しい、畢竟空株の空相場が到る処に行はれたので一時に事業が起ったやうに見えた」だけだと言わせている(内田魯庵『社会百面相』(上) 岩波文庫(1999)、原著、博文館(1902))。
- 16) 青年たちの身の丈に合わない野望は世間の批判を浴び、最後には嘲笑の対象にすらされるようになる。彼らは「空想病」に罹っているとされたのである。(五峰仙史『滑稽小説 空想病』大学館(1906)、児島百合松『薄資青年立身策』(1910) p.19)。
- 17) 藤村自身は第一高校生であり、失敗者とはいえないが、その将来は明治前期のような輝かしいものではなかった(キンモンス前掲書「6章 煩悶青年」)。「煩悶救済事業」を伝えた『読売新聞』の記事(1911年2月16日朝刊)によれば、その8割が男性であり、自殺志願者の大半の原因が就職難であったという。
- 18) 「修養ブーム」に関しては、キンモンス・竹内の前掲著作以外に、その経過を最も詳しく論じたものとして、王の前掲論文(2004)は有用である。竹内は代表的な「修養」論者であった新渡戸稲造の言説を引用しながら、「修養」における鎮めの機能を強調している。修養の重要な機能としてそうした側面があったことは間違いないが、当時大量に修養本を生産した作家たちの主張はそのようなものばかりではなかった。むしろ、「修養」を交際術などの実的な技法と結びつけることで立身出世に直接的に役立てることが望まれていた側面は強調される必要があるだろう。駿台隠士『処世交際術』大学館(1903)、蘆川忠雄『読心術修養』実業之日本社(1907)、同『交際術修養』実業之日本社(1909)などを参照のこと。また「修養」研究全体を整理したものとして瀬川大「「修養」研究の現在」(東京大学大学院教育学研究科 教育学研究室『研究室紀要』第31号(2005))がある。
- 19) これに対し、明治後半の修養主義を、近世以降の「通俗道徳」の流れに位置づけようとする立場もある(安丸良夫「民衆宗教と「近代」という経験」、島蘭進「近代日本の修養思想と文明観—新渡戸稲造の場合—」 脇本平也・田丸徳善『アジアの宗教と精神文化』新曜社(1997))。
- 20) 竹内前掲書(1997) p.18。
- 21) サミュエル・スマイルズ(中村正直訳)『西国立志編』講談社学術文庫(2003) pp.160-1、p.192。
- 22) 内田魯庵前掲書(上) pp.201-2。
- 23) キンモンス前掲書 p.150。
- 24) 徳富猪一郎「『成功論』を読む」(『読書余録』民友社(1905) pp.82-8)。
- 25) 谷本富『新道徳 商業適用』金港社(1908) pp.80-99。
- 26) 長谷川湊涯の『運命開拓 秘密之鍵』は、青年に対する実践的な成功指南書であるが、これなども、まず運命説や運命文学の否定から始めている(長谷川湊涯『運命開拓 秘密之鍵』楽山堂書房(1910))。
- 27) (小倉鉄堂『哲名術極秘書』第一巻 日本哲名学館(1912))。またその一方では、「八分主義」という修養主義的なモットーも掲げていた(同『哲名の二十五年』日本哲名学館(1933))。
- 28) 加藤咄堂『運命観』井冽堂(1904)「緒言三則」 p.2。

- 29) 同 p.157。
- 30) 雑誌『成功』に関しては、キンモンス前掲書、竹内前掲書 (1978)。
- 31) 幸田露伴『努力論』岩波文庫 (2001)、原著、東亜堂 (1912)。
- 32) 「人世行路」が意味するところは、前田愛「明治立身出世主義の系譜—『西国立志編』から『帰省』まで—」前田愛『近代読者の成立』岩波現代文庫版 (2001) p.139、『文学』1965年4月号初出。なお、ここでは前田の規定よりそうした意味をやや広くとっている。
- 33) 本稿に関係する近代の姓名学については、すでに検討したことがある (小林康正『「家」をつくる—「姓名学」・「乃木家再興問題」・「居所指定権」における姓名の近代』京都文教大学人間学研究所『人間学研究』Vol.5 (2005))。石川啄木の人生は、近代姓名学の存立条件である以下の項目と関係が深い。①新聞メディアの拡張による「信憑世界」の拡張と代替、②立身出世イデオロギーの大衆化、③資本主義体制編成の確立が複合的に生み出した状況。なお、「姓名学」という名称は、明治も最末期になって登場するもので、それまでは「姓名判断」が最も一般的な名称である。したがって、姓名学という用語は、日本近代において成長していくこの類の実践を総じて捉えるために用意した分析概念である。
- 34) 全集第五巻 p.172。『小樽新報』10月24日付の第3号には、海老名の筆による姓名判断の2回目の連載記事が掲載されている。このとき判断されたのは地元の芸者と思しき人物であった (長久保源蔵『創作民謡・童謡詩人 野口雨情の生涯』暁印書館 (1980) pp.178-9)。
- 35) 全集第五巻 p.172。姓名判断をこのように表記する場合が、明治にはまま見られる。全集第五巻 p.174。
- 36) 占いや占い師に関係するものと思われる啄木の作品としては、「泣くがごとく首をふるはせて手の相を見せよといひし易者もありき」『一握の砂』がある。この惨めな易者を海老名であるとする解釈もあるが (『石川啄木集』日本近代文学大系 第23巻 (1969) p.519)、根拠は明示されていない。
- 37) 全集第五巻 p.173。1907年10月10日。
- 38) 全集第六巻 pp.380-2。1906年3月26日。姉の死についての義兄の手紙が届いてほぼ1週間後のことである。注5参照。
- 40) 全集第五巻 p.170。1907年10月2日。
- 41) 全集第六巻 pp.380-2。1906年3月26日。
- 42) 夏目漱石『彼岸過迄』岩波文庫 (2000)、原著、春陽堂 (1912)、なお、漱石作品における「運命」の使用に関しては、森田喜郎『夏目漱石論—「運命」の展開—』和泉書院 (1995)。
- 43) 柴田宵曲「占ひ」『明治の話題』ちくま学芸文庫 (2006) pp.199-203。
- 44) 内田魯庵の「人相見」には、魯庵が坪内逍遙、戸川残花と連れ立って、評判の人相見を冷やかに出掛けた話が紹介されているが、残花について、「クリスチャンであり、ミスチツクが好きで、心靈無限力を信じ、此の人相実験の発願人であり案内者であるくせに残花は、『お前達には騙されないぞ』といふやうな顔を粧ふて較やもすれば馬鹿にするやうな口気があつた」と記している (佐藤愛子編『占』日本の名随筆82 作品社 (1989) 所収)。運命説に対するアンビバレンツを示した一例である。こうした態度は、同時代の無神論者中江兆民が見せた法を設けてこれを「禁絶すべし」 (『一年有半・続一年有半』岩波文庫 (1995) p.48) という徹底した態度との隔たりは大きい。
- 45) 注意しておきたいのは、このような主体と客体は近い存在というにとどまらず、まま置き換えが可能なものであったということである。苦学生を対象とした就職 (副業) 案内において、易者という「職業」はある程度有力なものであったらしい。職業案内書には、牛乳配達や車夫などと並んで、その紹介があるほかに、当時の小説や新聞報道の中に、学生の易者が登場している。
- 46) 全集第五巻 p.177。12月23日。海老名がこのような僥倖に恵まれたのは、おそらくは新聞に記事を掲載したことが大きいと思われる。新聞と姓名判断には根源的でも表現していいような関係が存在しており、それは新聞というメディアがもたらした世界の拡大と代替というありようと深く結びついているが、さらにインプットとアウトプットの場面において新聞は姓名判断の資源となったのである。この点は、その開祖・佐々木盛夫の分析として行う予定である。いずれにしろ、ここで注意しておいていいのは、啄木も、海老名も出版、新聞というメディアに基盤を置こうとしていたという共通点である。
- 47) 神秘堂蛭名又一郎『新説 神秘術』薫志堂 (1898)、明治31年刊。改訂版を明治37年に出版している。いずれの版か不明であるが、啄木の日記には、海老名から直にこの著作をもらったと記されている。なお、近代の姓名判断の著作で最も早いものは、菊地準一郎『古今姓名善

- 悪論』明治26(1893)年である。
- 48) 全集第五巻 p.177。12月27日。
- 49) 「時代閉塞の現状」は多くの場合、大逆事件と結びつけて解釈されてきたが、キンモンスが正しく指摘するように、その主眼は青年たちの不遇に関する不満であったことが了解できる。
- 50) 「時代閉塞の現状」(全集第四巻 p.262)。なお、若者についてのこうした現状認識は、啄木の卓見でもなんでもない。これに類する言及は、明治30年代後半以降通有のものである。たとえば、評論家の大町桂月『わが筆』(日高有倫堂(1905))に所収された「中学卒業生」(pp.175-8)「教育ある田舎青年」(pp.180-1)は同様の認識から逆の結論に辿りついた一例である。
- 51) 日清戦争後の中等教育は目覚ましい発展を遂げたが、中学生にとって卒業にこぎつけるのは、相当容易なことではなかった。1900年から10年にかけては、一貫して卒業生よりも中途退学(中退)者の方が多く、卒業生がそれを上回るのはようやく11年になってからである(斉藤利彦『競争と管理の学校史—明治後期中学校教育の展開』東京大学出版会(1995) pp.36-77)。また、こうした事情は当時の岩手中学においても、同様であったと思われる。(岩城之徳「解題」全集第五巻 p.399)。さらに中学を卒業したとしても、高等学校への進学はきわめて狭き門であった。こうした就学の全体的状況を考慮せず、啄木の退学という事実だけを取り出して、聖痕視したり、その逆にラベリングの材料とするのは危険である。
- 52) 竹内前掲書(1997) pp.139-165。
- 53) 『読売新聞』明治35年10月8日の論説「青年立志の方針」など。
- 54) 竹内前掲書(1997) p.29。
- 55) 柳田前掲書 pp.383-5。
- 56) 姓名判断の発明者の代表的人物・佐々木盛夫がそこに辿り着くまでの活動と経歴は、絵に書いたようにこうした事情と重なってくる。佐々木に関しては別に検討する予定である。
- 57) ただ海老名又一郎を啄木と同じ世代に加えるのは正確ではない。明治31年の彼の著作で自分に対してなした運命鑑定「自鑑」から推測すると、その当時37、8歳前後ではなかったかと思われる。であれば、彼は前田愛が言うところの立身出世の「兄達の世代」に属し(前田前掲書)、姓名学の開祖とされる佐々木盛夫と同世代といえる。その意味で、何度もの捲土重来に挑み続ける立身から積み残された世代というべきだろう。
- 58) 松山巖「解説」坪内祐三編集『石川啄木—明治の文学第19巻—』(2002) 筑摩書房。
- 59) マーデン『運命開拓策』成功雑誌社(1903)。マーデンの日本での受容に関しては、キンモンス『立身出世の社会史』「7章 新しい世代の新しい価値観」。
- 60) 島貫は明治30年に苦学生を援助するための日本力行会を東京に設立しているが、啄木は最初の上京の際、後輩の所属を機縁として、立ち寄り、宿泊もしている。(全集第5巻 p.14。11月7日。) 島貫は『成功之秘訣』など(明治25年)を出版し、苦学の支援者として世に広く知られるようになる(相沢源七『島貫兵太夫—日本利器業界の創立者—』教文社(1986))。
- 61) 全集第五巻 p.148。1907年5月2日。
- 62) 生命力のこと。
- 63) 全集第五巻 p.5。『秋韻笛語』「序」
- 64) 全集第五巻 p.14。1902年11月7日。
- 65) 全集第五巻 p.28。
- 66) 成功は実業を中心に多くの分野で目指されたと思われるが、文学もそうしたフィールドの一部をなしていたと考えるべきである。たとえば、中央における藤村の成功に影響されて、多くの地方の青年たちが詩集を出版している。周知のように、短歌で名声を博した啄木の場合も、処女出版である『あこがれ』は詩集であった。また、与謝野寛の下に多くの青年が集まったことやそうした文学青年が帝国大学などに所属するものが少なく、多くは私立の専門学校・大学に所属していたことは、それらが手っ取り早く成功と名声を与えてくれるものだったからだと思われる。
- 67) 全集第五巻 p.96。1906年4月11-16日。こうした啄木の運命観は時代の風潮にあったきわめて平均的な思想である。たとえば、格調という点で大いに異なるが、啄木の嫌った大町桂月が「現代の煩悶と文学」『太陽』(明治38年2月号)に記した「力に進み、運にとまらるべき也」という人生観と内容的にみて、ほぼ差異がないといえる。
- 68) 啄木は独歩の死に衝撃を受け、自己の死を望むようになる(全集第五巻 pp.283-5。1908年6月24日-29日)。
- 69) キンモンスは、独歩を煩悶青年と成功青年の両方を合わせもつ小宇宙的存在としている(キンモンス前掲書 p.212)。
- 70) やや文脈が異なるものの、中野重治は北村透谷—二葉亭四迷—国木田独歩—石川啄木という詩人の系列を指摘している(中野重治「啄木に

関する断片」(『啄木全集』第八巻(1968) pp. 98-106、原著『驢馬』(1926. 11月))。文学を超えて、人生の全般的考察を行うがゆえに、彼らは物質的にも精神的にも幾多の苦悶を経験したというのである。

71) 国木田独歩『運命論』佐久良書房(1906)。

72) 長久保前掲書 p.173。

73) 石井寛治「日本産業革命と啄木」『国文学—解釈と教材の研究—』43巻12号(1998) p.47。

74) 山本鉦蔵『小樽区外七郡案内』(1909)によれば、小樽では明治35、6年を境に多くの新聞が創刊されるようになったという。執筆当時小樽には、全道3大紙に数えられる小樽新聞の他、小樽毎夕新聞、小樽商業新報、小樽実業新聞、北海タイムズ支社などが存在した。啄木が参加した小樽新報は「四五青年実業家の手に依りて四十一年創刊されたる月三回の新年(ママ)なり、創刊以来月尚浅しと雖も、噴々たる好評を以て迎えられ、数千部を印刷す、追て月六回と為し、更に日刊に進むべき計画中なりと云へば、其発展期して待つべきなり。」(p.4)とある。なお、小樽新報は実際には啄木が離れてしばらくすると休刊に至っている。

75) 伊藤整『日本文壇史12』p.71。『一握の砂』の「忘れがたき人人」には、北海道の汽車を題材に選んだと思しき作品が散見される。

76) 小樽の発展の様子は、明治41年に出版された『小樽案内』に詳細に記されているが、ここではその序文の紹介に止めよう。「小樽ハ元北海ノ一漁村明治維新ノ後治庁ヲ札幌ニ置シヨリ陸海要衝ノ区ニ当リ街衢漸ク膨張シテ終ニ本道第一商業繁栄ノ地トナリ、地勢雄勝、山水明麗、船舶ノ輻輳、汽車ノ往来、其利便ヲ極メ、本道海陸ノ産物府県貿易ノ雜貨多ク此地ニ頼リテ吞吐ス而シテ其ノ輸出入ノ数量ハ神戸ノ下横浜ノ上ニアリ戸数一万四千余、人口九万余、司法行政ノ機関、銀行会社ノ塵肆、其他、郵便、電信、電話、電燈ノ諸設備、港灣ノ築設、倉庫ノ拡大、輓近数年ノ間ニ於テ燦燦タル光輝ヲ発揚シタルハ実ニ駭ク可シト為ス…」(添田弼「小樽案内序」浪越重隆『小樽案内』札幌博光社(1908))。

77) 全集第四巻 p.139。

78) 「かなしきは小樽の町よ／歌うことなき／声の荒さよ」『一握の砂』。

79) 他にも、「初めて見たる小樽」(『小樽日報』(1907年10月15日)に「朝から晩まで突貫する小樽人」という指摘がある(全集第八巻 p. 313)。

80) 全集第五巻 p.171。1907年10月5日。雨情の

話の信憑性に関しては、長久保前掲書 pp.170-1 参照。

81) 北海道に対して当時の人々が抱いていた印象を、啄木は次のように記している。「北海道には到る所に金が転がって居て、誰に構はず人の拾ふに委しくあるかの様に、内地の人は思つて居た。(今でもさう考へる人が大分ある。)そして一度津軽海峡さへ越へれば、何かしら職業の口があつて、何職業によらず内地に比して滅法高い報酬が得られるかの様に考へて居る。目を開いてさへ居れば毎日一攫千金の機会に邂逅(めぐりあ)ふ様に考へて居る。…」(『北海の三都』全集第四巻 p.139。) また、「樺太に入りて／新しき宗教を創めむといふ／友なりかな」(『一握の砂』)と歌ったその人物と啄木が遭つたのも、在道時代であつたと思われる。野望の発露は様々な方面に亘っていた。

一方、明治の作家が実業と関係することはそれほど珍しいことではなかった。さらにそれが北海道などの新開地と結びつく例もあつた。

「耽溺」(1909)を発表して自然主義の小説家としての地位を得た岩野泡鳴が、樺太の蟹缶詰事業に乗り出して失敗し、北海道に止まった例などがその代表といえる(伊藤整『日本文壇史14』講談社文芸文庫(1997))。

82) 全集第五巻 p.223。1908年2月29日。

83) 全集第七巻 p.187。小笠原謙吉宛書簡、藪禎子「啄木と“家”／北海道」『国文学—解釈と教材の研究—』43巻12号(1998) p.117。

84) 全集第五巻 p.223。

85) 啄木は決意に関してこれに類した表現を多用している。たとえば、全集第七巻 p.186、p.188。

86) マイケル・T・ギルモア(片山厚、宮下雅年 訳)『アメリカのロマン派文学と市場社会』松柏社(1995)。

87) 山本芳明「明治メディアと啄木—「小生の文学的運命を小気味よく試験する心算に候」」『国文学—解釈と教材の研究—』43巻12号(1998) pp.38-9。

88) 伊藤整『日本文壇史12』pp.86-7。啄木はすでに明治39年段階で、小説の可能性を感知し、執筆を決心し早速執筆している。この背景には、漱石の登場と藤村の『破戒』の成功があつたからである(全集五巻 p.102。大東和重『文学の誕生 藤村から漱石へ』講談社・選書・メチエ(2006))。

89) 伊藤整『日本文壇史13』pp.50-94。

90) 啄木は、小説『面影』の原稿を後藤宙外に送つたものの、掲載を拒否され、「今の世で筆で

- 立つといふ事は到底至難である」と言い渡されている（全集第五巻 p.104。1906年7月中）。
- 91) 柳田前掲書 p.383-4。
- 92) 竹内前掲書 pp.248-50。
- 93) 桃介は実業家としても成功したが、その盛名は「須く先づ蛸殻町における「桃介」若くは「株家の桃介」を看るを便とするの感」に拠っていた（「福沢桃介君 故三田翁の女婿 奇略縦横の才人」渡辺慎治編『天才乎人才乎 現代実業家月旦』東京堂（1908））。
- 94) 福沢桃介『富の成功』東亜堂書房（1911）。
- 95) 福祿寿翁『運命の開拓 成功自在』尚文堂（1910）p.4、p.19など。なお、同一著者と思われる勝永徳太郎は同年に『処世成功秘訣』という著作も執筆しており、こちらは成功の要因として交際を強調する機会主義的な論調となっている（『処世成功秘訣』尚文堂（1910））。
- 96) 福祿寿翁前掲書 p.46。
- 97) 福祿寿翁前掲書 pp.46-7。
- 98) 福祿寿翁前掲書 pp.39-40。
- 99) 福沢前掲書 pp.62-4。
- 100) 日本近代における＜霊＝術＞系新宗教の流行に関して、「2つの近代化」の休止期、あるいは一段落期に起きるとの説がある（西山茂「5章 現代の宗教運動－＜霊＝術＞系新宗教の流行と「2つの近代化」－」大村英昭・西山茂編『現代人の宗教』有斐閣（1988））。呪術ではなく、あくまでも＜霊＝術＞系新宗教に焦点を当てた分析であるので、小稿の検討から直接論評するわけにはいかないが、呪術の流行を日露戦後のアノミー状況と結びつける点に関しては一考の余地があると考ええる。これまで述べてきたように、この時期の呪術の一形態である運命説＝占いの再定義とそれによる隆盛は、直接的に近代の編制の一部を形成していたわけであり、それは必ずしも価値喪失と正の関係性を持っていたわけではない。それらは近代の編制換えと向き合った際の認知的な態度と捉えるべきであろう。
- 101) 時の総理大臣西園寺公望を巻き込んでなされた『読売新聞』主筆・竹越与三郎の雨声会の目論見などは、そうした動向の一環を伝えたものと考えられる（伊藤整『日本文壇史11 自然主義の勃興期』講談社文芸文庫（1996）pp.9-25）。
- 102) 啄木から歌集の整理を頼まれた土岐哀果が、預かったノートとは別に、帋片に書きつけられたこの歌を発見したもので、最晩年の作歌と思われる。なお、この音はいわゆるラッセル音だと思われる。
- 103) 肺病患者を出した家系が「病マケ」と呼ばれ、通婚や日常的付き合いにおいて差別されることが、東北地方にはまま見られた。また実際東京であっても差別的な扱いは受けた。一家が病に倒れた1911年8月には、大家の床屋が商売に差し支えるという理由から転居を迫られ、そうせざるを得ない状況に追い込まれる。岩城之徳「石川啄木集解説」『日本近代文学大系第23巻 石川啄木集』角川書店（1969）p.47。
- 104) こうした見解に対する異論にはおもに2つの立場がある。1つ目は、啄木が本当に結核であるということを知らなかったという立場であり、2つ目は最近の新しい見解であるが、啄木の死因は肺結核ではないという立場である。前者の代表的な見解としては、『日本近代文学大系23巻』の注釈者（今井泰子）が、こうした認識不足が医学的未発達のためであるとしているものなどがある（p.563、また福田前掲書 p.122）。実際、明治期において結核という診断結果が明示されるのは、痰から結核菌が見出されるなどかなり症状が進行した段階であることは確かであった。しかし、明治30年代後半以降には、結核に関する通俗的な解説書が出版され（石神亨『通俗肺病問答』丸善（1903）など）、さらに患者数も増加し、結核の症状も知られるようになっていた。診断における課題も早期発見に移っていたのである（原栄『晩近肺結核早期診断及治療論』吐鳳堂（1908））。とくに啄木の私淑した国木田独歩の闘病生活が読売新聞に連載され、その後出版されたことなどは、啄木にその病状を知らせる機会となったはずである（国木田独歩（真山青果編）『病牀録』新潮社（1908））。2つ目の議論は、啄木の死因が肺結核ではないという新見解と関係する。近藤典彦らは啄木の病歴を詳細に検討し、医学的な知見の援助を得ながら、啄木の死因は肺結核ではなく、結核症による衰弱死だとする（近藤典彦・柳沢有一郎「啄木の病歴」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』53（2004））。きわめて重要な新見解であろう。しかしここで問題にしているのは、本人の病識と肺結核に限らない周辺的な症状を含めて死の病と社会的に認知されている結核の関係である。本文で言及するように、繰り返し現れる結核の症状に対して、それを否定しようとする態度こそが問題なのである。
- 105) 家庭内での症状の明確な発現時期は、啄木が1911年1月27日（腹部膨張感。「慢性腹膜

- 炎」の診断で、2月4日に入院。)、妻節子が1911年7月14日(気管・胃腸・咳・血色悪化。同月28日に「肺炎加答児」の診断。)、母が1912年1月中旬(咯血。同月23日に「何年も前よりも知れない瘧疾の肺患」との診断。)である。
- 106) 全集第六巻 p.243。1912年1月23日
- 107) たしかに直前に「咯血したからこそ『或は…』と思つてゐた」とあることから、それを疑っていなかったと言っているわけではない。しかし、こうした記述は医者からの告知を受けて後に記された記述であることを考慮する必要がある。たとえば、ここで使われている「咯血」という用語は肺結核を証拠付ける肺からの出血を指すが、これについて、啄木は21日の日記では「吐血」と記していて、これが胃からの出血であるという認識を示しているのである。したがってやはり、このときまで母の結核については気付かなかったというのが一般的な解釈となる。
- 108) 全集第六巻 pp.240-2。
- 109) 全集第六巻 pp.243。1912年1月23日。
- 110) 全集第七巻 pp.380。1912年1月24日発信。
- 111) 同前。
- 112) 広沢豊作『結核菌物語』博文館(1910) p.110。
- 113) 結核患者やその周辺的な人物がどのような態度を取るのかということに関する啄木の知識は、彼が発病する8ヶ月ほど前に執筆した小説『我等の一团と彼』(『啄木全集』第三巻(1967)所収)から窺うことができる。そこで肺病となる新聞社の画工松永の姿は新聞社で校正をしていた啄木を髣髴とさせるあたかも未来記のような内容になっている。啄木はこのような小説を書きながら、闘病中の日記類には、タブーのように結核・肺病の言葉が避けられているのである。なお、近藤典彦らは、日記手紙などの資料を網羅して、啄木の病状をほぼ明らかにしている(近藤・柳沢前掲論文)。
- 114) 全集第六巻 pp.238-9。1912年1月7日。
- 115) 全集第六巻 pp.237-8。1912年1月4日。
- 116) 前掲『日本近代文学大系23巻』p.486の注釈四参照。
- 117) 全集第六巻 p.241。1912年1月19日。
- 118) 福田前掲書 p.148。
- 119) 啄木は臨終の間際まで、田舎に住んでジャムをつくる話などをしていたという。今井泰子は、結局、自分が置かれている現実を現実として肯定したりあきらめたりすることのけっしてできぬ性格だったとしている。「注釈」(『日本近代文学大系 第23巻』p.210)。この点に関し
- ては様々な捉え方があると思われるが、小稿の文脈から言えば、啄木が信奉する運命開拓言説にこのような死が含まれていなかったということである。
- 120) 福田前掲書 pp.100-176。
- 121) 徳富蘆花『小説 不如帰』岩波文庫(2006)。
- 122) 鈴木晃仁「ナルシシズムの病—十八世紀イギリスにおける結核の表象—」成蹊大学文学部学会編『病と文化 成蹊大学人文叢書』3 風間書房(2005) p.74。
- 123) スーザン・ソング(富山太佳夫訳)『隠喩としての病 エイズとその隠喩』みすず書房(2006)
- 124) 鈴木前掲書 p.74。
- 125) 18世紀ロマン主義以前にソングなどの主張した結核の美化が起きていたので、鈴木はロマン化の語を使用していない。後に引用する柄谷行人もロマン化の本質がロマン主義に規定されるものでないことを主張している。小稿ではこの用語が慣用的に流通している現状からこれを使用した。
- 126) 鈴木前掲書 p.79-95。
- 127) 柄谷行人「病という意味」『日本近代文学の起源』講談社文芸文庫(1988) p.129-152。
- 128) 柄谷前掲書 p.152。
- 129) 言及された数少ないものとしてあげることができるのであれば、それは神経衰弱など煩悶に関わる精神的な病であった。その意味でいうと、「煩悶」は注目すべきである。鈴木によれば、結核はナルシシズムと深いかわりがある。煩悶というナルシシズムが主体の形成に与えた意味はここでの立論を深める契機となるはずである。
- 130) ただ結核予防として推奨された呼吸法(北里柴三郎『強肺深呼吸法』広文堂(1911)など)が、修養という文脈に登場する呼吸を重要なモチーフとする様々な身体技法(岡田式静座法など)と関連する場合もあった。少なくとも呼吸への関心は結核の流行とかわりがある。
- 131) 福田前掲書 pp.103-4。
- 132) 木下尚江は、明治37年に施行された「肺結核予防ニ関スル内務省令」のそのお粗末さを批判している。

ABSTRACT

Discursive Space in the Discourse of Destiny in the Era of Japan's Industrial Revolution

Kobayashi Yasumasa

This paper aims to shed light on the discourse of "destiny" in the era of Japan's industrial revolution, and to explore the implicit and explicit relations which it has to other discursive entities and to the contemporary social arrangement. In order to do so, I chose to focus on poet *Ishikawa Takuboku* (1886-1912), and to trace the change of his thought on "destiny" during his life.

During the period of social change in the *Meiji* Restoration, *risshin shusse* (climbing up the social ladder) was commonly accepted as the most important idea. The *Meiji* youth were expected to struggle for it.

In the early twentieth century, *risshin shusse*, which was encouraged by the substantial economic growth of the time, impelled the Japanese ambitious youth to strive for their own "success" (*seikou*), and this word acquired a new meaning that built up a fortune.

However, the stabilization of social order and frequent recessions in the second half of the *Meiji* led most of them to failure. In such circumstances, those people who escaped from fierce competition for acquiring money or status emerged one after another. They were called "anguished youth" (*hanmon seinen*). It was thought that their excessive aspiration had to be cooled down so as to calm their anguish. Therefore, a large body of literature focusing on "cultivation" (*syunyou*), which advised the youth to conduct themselves impeccably, was published. This useful literature helped the youth to set suitable objectives for their social position.

As the capitalist economy rapidly developed, the discursive space whose folk terminology consisted of words such as "success", "anguish", "cultivation", etc., was built up. During the radical changes in the world during this time, people participated in it, and used this terminology as a compass to find the way to their goal.

Nevertheless, it is clear that the discursive space reflected an ambivalent attitude toward life. The characteristics of it are made explicit in the usage of the word *unmei* ("destiny", or, "fate"). In those days many people insisted that they ought to "carve out their own fortune" (*unmei no kaitaku*); on the other hand, many books, which claimed that they held, "the secret of success" (*seikou no hiketu*), were published.

Takuboku was an ambitious young man of the *Meiji* era who lived in the discursive space. Therefore, his attitude to destiny was ambivalent. It follows from this that the investigation into his thoughts on destiny elucidates the significant characteristics of the discursive space in the era of Japan's industrial revolution.